

# 宮崎学園都市 埋蔵文化財発掘調査概報

(Ⅲ)

1982

宮崎県教育委員会

宮崎学園都市  
埋蔵文化財発掘調査概報  
(Ⅲ)

1982

宮崎県教育委員会



前原南遺跡空中写真全景

## 序

宮崎県教育委員会は地域振興整備公団の委託を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。昨年度は14号地・20号地の1部をはじめ5遺跡と石塔群について発掘調査を実施しましたが、昭和57年度も10号地・19号地をはじめ5遺跡について調査を行いました。本書はその概要報告であります。

本年度の調査では、本県での初の縄文後期の住居跡群の発掘や弥生後期後葉から終末にかけての花弁状の住居跡群の検出、さらに、昨年度に続いて古代から中世にかけての掘立柱の遺構の確認など数多くの遺跡群を明らかにすることことができました。これらは南九州における建築様式の推移を解明するために貴重な資料になると存じます。又、縄文時代の集石遺構を樹脂で固定し、取上げることができましたことも特記されることと存じます。

なお、これらの貴重な調査の成果が学術関係者だけではなく社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、文化財保護行政推進のための一役となることを期待いたします。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された地域振興整備公団及び宮崎市、清武町並びに関係各位に衷心から謝意を表します。

昭和58年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 後藤 賢三郎

## 例　　言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて実施した、宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の昭和57年度の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査には、県教育庁文化課岩永哲夫、面高哲郎、永友良典、長津宗重、北郷泰道、菅付和樹、日高孝治、谷口武範が当った。
3. 本書の執筆は、調査員が分担し、文責については目次と文末に明記している。
4. 本書の編集は、調査員で協議の上、北郷と菅付が当った。
5. 本年度の特別調査員として、弥生土器編年等の指導を小田富士雄氏、陶磁器関係の指導を亀井明徳氏、出土自然遺物（貝類）の同定を木村幾多郎氏、縄文集落跡発掘の指導を小林達雄氏、出土近世人骨の同定を松下季幸氏、分部哲秋氏らにそれぞれお願ひした。また、炭化樹種の同定は大塚　誠氏に、プラントオパール分析は藤原宏志氏に、56年度に引き続きお願ひした。記して深甚の謝意を表します。
6. また、下記の機関等には、資料の調査・照会について各種の御配慮・御助言を得た。
- 福岡市教育委員会、米子市教育委員会、千葉県文化財センター、京都大学埋蔵文化財研究センター、滋賀県埋蔵文化財センター、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、九州歴史資料館、福岡県教育委員会、熊本県教育委員会、大分県教育委員会、鹿児島県教育委員会。
7. 11号地出土の近世人骨について、松下・分部氏から玉稿をいただいた。
8. 学園都市建設予定地内の遺跡の立地を含む地形分類及び包含層の花粉分析等については、立命館大学大学院生外山秀一氏の綿密な調査とその成果があり、多くの御教示と御助言を得た。
9. 本報告書において、磁北はM. N. で表わし、その他は全て平面直角座標系の北方向を表わす。
10. 56年度までは、遺跡名を番号によって表わしていたが、本年度から字名に隨時変更していくものとする。これは、当初の計画通り各遺跡の規模、性格等が年次的調査により確定してきたためである。

## 本文目次

I	遺跡の立地と環境	（北郷）	1
II	調査の経過	（菅付）	2
1.	調査に至る経緯		2
2.	調査の経過		2
3.	調査の組織		3
III	調査の概要		4
1.	平畠遺跡（10号地遺跡）	（北郷）	4
2.	堂地東遺跡（11号地遺跡）	（長津・日高）	8
3.	熊野原遺跡（14号地遺跡）	（菅付）	17
4.	前原西遺跡（16号地遺跡）	（岩永・面高）	27
5.	前原南遺跡（19号地遺跡）	（永友・谷口）	35
IV	結語—住居の変遷にふれて—	（北郷）	44

## 〔付編〕

I	宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨	47	
	長崎大学	松下孝幸・分部哲秋	
		石田 肇・佐熊正史	
II	前原西遺跡集石造構の取り上げについて	（永友）	60
III	23号地石塔群の保存処理及び復元について	（〃）	62

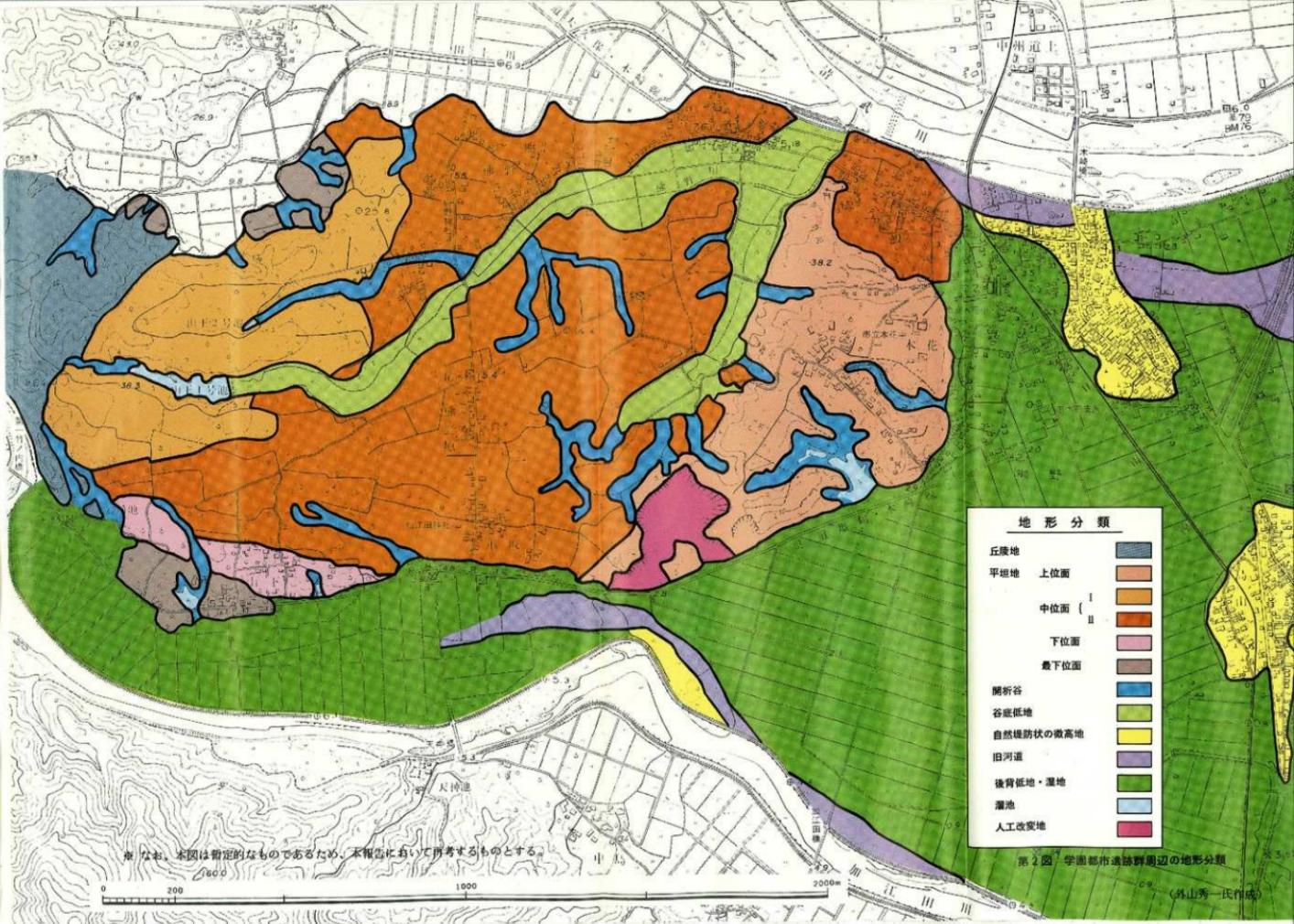
## 挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地図	
第2図 学園都市遺跡群周辺の地形分類	
第3図 平畠遺跡 J - 1号住居跡実測図	4
第4図 平畠遺跡 J - 2号住居跡実測図	4
第5図 平畠遺跡 J - 1号住居跡出土縄文土器実測図・拓影	5
第6図 平畠遺跡 J - 1号住居跡出土石斧実測図	5
第7図 平畠遺跡 J - 2号住居跡出土縄文土器実測図	5
第8図 平畠遺跡 1号住居跡実測図	6
第9図 堂地東遺跡 2号住居跡実測図	9~10
第10図 堂地東遺跡 I区遺構分布図	12
第11図 堂地東遺跡出土土器実測図	13
第12図 堂地東遺跡 2号住居跡出土遺物実測図	14
第13図 熊野原遺跡B地区遺構分布図	19~20
第14図 熊野原遺跡B地区住居跡出土土器実測図	21
第15図 熊野原遺跡B地区5号・6号住居跡出土土器実測図	23~24
第16図 前原西遺跡B地区遺構分布図	27
第17図 前原西遺跡B地区基本層序	28
第18図 前原西遺跡B地区集石遺構実測図	29
第19図 前原西遺跡B地区出土遺物実測図	30
第20図 前原西遺跡B地区2号住居跡実測図	32
第21図 前原西遺跡B地区住居跡出土遺物実測図	33
第22図 前原南遺跡8号・9号住居跡実測図	36
第23図 前原南遺跡4号・6号住居跡実測図	37
第24図 前原南遺跡9号住居跡出土土器実測図(1)	39
第25図 前原南遺跡9号住居跡出土土器実測図(2)	40
第26図 前原南遺跡出土土器実測図	41
第27図 住居跡変遷一覧図	44~45

## 図 版 目 次

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 図版 1 平畠遺跡(1)       | 図版 9 熊野原遺跡 B 地区(3) |
| 図版 2 平畠遺跡(2)       | 図版10 前原西遺跡(1)      |
| 図版 3 堂地東遺跡(1)      | 図版11 前原西遺跡(2)      |
| 図版 4 堂地東遺跡(2)      | 図版12 前原南遺跡(1)      |
| 図版 5 堂地東遺跡(3)      | 図版13 前原南遺跡(2)      |
| 図版 6 堂地東遺跡(4)      | 図版14 前原南遺跡(3)      |
| 図版 7 熊野原遺跡 B 地区(1) | 図版15 前原南遺跡(4)      |
| 図版 8 熊野原遺跡 B 地区(2) | 図版16 前原南遺跡(5)      |





## I、遺跡の立地と環境

宮崎学園都市建設予定地の約300haに及ぶ標高15mからの台地は、台地の北東部から二支に分れてほぼ西方向と南方向に延びる谷底低地とそこから枝分れした開析谷とに区切られ、遺跡はそうした中に立地している(第2図)。

平畠、堂地東、熊野原、前原西、前原南の5遺跡は、すべて宮崎市大字熊野に所在している。

平畠遺跡は、その中で最も西方に位置する遺跡で、その分布は台地の中位面のI～IIに及ぶ。本年度の調査対象はその内で、東端部の約20,000m<sup>2</sup>にわたる地区である。北方はほぼ東西方向に延びる谷底低地が区切り、遺跡は南東方向の傾斜で広がる比高差約5m、標高25～30mの部分に位置している。

堂地東遺跡は、平畠遺跡の北側に谷底低地を挟み位置し、さらにその北側には開析谷が発達している。平畠遺跡と同じく中位面のI～IIにわたる場所に所在するが、台地としては東方向に延びている。北側開析谷との比高差は約7mあり、東西方向での比高差は約7～8m、標高20～28mに位置している。本年度の調査対象地は、55年度調査区の北側と東側にある。

熊野原遺跡は、台地の中位面IIの北縁辺にあたり、堂地東遺跡の南に谷底低地を挟み立地する遺跡で、56年度調査区の西側を主とする。熊野川に面した北向きの傾斜地まで遺構の広がりが認められている。標高は約15mで、谷底低地との比高差は約3mである。

前原西遺跡は、熊野原遺跡の東方に開析谷を挟み位置するもので、北側には10、11号地まで延びる谷底低地をひかえている。本年度の調査対象地は、56年度の北側にあたり、中位面の中で最も高位な標高17m程度の部分を中心として、北東方向への傾斜をもつ場所である。

前原南遺跡は、前述のこれまでの遺跡と異なり、南方向に延びる谷底低地をのぞむ中位面IIに立地している。谷底低地との比高差約7m、標高12～13mに位置する。遺跡に向かって東方より小さな開析谷のがびており、そのためにゆるやかではあるが遺跡地では、アカホヤ面において東方に向かう中窪みの状態が観察されている。

(北郷泰道)

## II、調査の経過

### 1. 調査に至る経緯

県教育長文化課では昭和55年度から宮崎大学を中心とする宮崎学園都市建設事業に伴う事前発掘調査を実施して來た。

昭和57年度は、宮崎学園都市建設局、地域振興整備公団との協議の結果、地域振興整備公団事業区のうち平畠遺跡、堂地東、熊野原、前原西、前原南の各遺跡と23号地石塔群の合計6遺跡を地域振興整備公団の委託を受け調査することになった。このうち、平畠遺跡は本年度を第1次調査とした。常地東遺跡は昭和55年度に引き続き、また、熊野原、前原西、23号地石塔群は昨年度に統いて第2次調査を行い、前原西、23号地石塔群については、前原南遺跡とともに完掘するに至った。

### 2. 調査の経過

発掘調査は、昭和57年4月から昭和58年3月まで、6月の前半を除きほぼ1年間行った。4月から約2ヵ月間は23号地石塔群の実測、移転等の整理作業を実施した。また、6月以降は、堂地東、熊野原、前原南遺跡については3班がほぼ同時に調査に入り、約2週間遅れて前原西遺跡の調査に残り1班が入った。平畠遺跡は本年度調査対象面積が2万m<sup>2</sup>と広大なため、9月以降調査の終了した班から順次発掘に当たることになった。

調査は昨年度の試掘調査の成果をふまえ、各担当者の判断により表土剥ぎを重機で行い、地形或いは座標北の方向に合わせて地区設定をした。

また、前原南遺跡については空中写真測量を実施した。発掘調査の日程と各遺跡の主な担当者は次の通りである。なお、9号地遺跡は、幹線道路関係の800mのみ試掘を行った。

#### 〈調査担当者〉

①23号地石塔群	昭和57年4月2日～5月31日	岩永・面高・永友・長津 北郷・菅付・日高・谷口
②堂地東(11号地)遺跡	昭和57年6月24日～昭和58年1月31日	長津・日高
③前原南(19号地)遺跡	昭和57年6月24日～12月17日	永友・谷口
④熊野原(14号地)遺跡	昭和57年6月28日～9月6日	北郷・菅付
⑤前原西(16号地)遺跡	昭和57年7月7日～10月20日	岩永・面高
⑥平畠(10号地)遺跡	昭和57年9月3日～昭和58年3月25日	岩永・面高・永友・長津

北郷・菅付・日高・谷口

⑦9号地遺跡 ━━━━━━ 試掘調査のみ

北郷・菅付

### 3. 調査の組織

調査の組織については下記のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査指導 宮崎学園都市遺跡発掘調査委員会

(委員長)石川恒太郎(県文化財保護審議会委員) (委員)岡崎 敬  
(九州大学教授) 田中熊雄(宮崎大学名誉教授) 田中 琢(奈良国  
立文化財研究所埋蔵文化財センター長) 寺原俊文(県文化財保護審議  
会委員) 日高正晴(前同) 森貞次郎(九州産業大学教授) 柳 宏  
吉(県文化財保護審議会委員) 横山浩一(九州大学教授)

特別調査員 大塚 誠(宮崎大学講師) 小田富士雄(北九州市立歴史博物館主幹)  
龜井明徳(九州歴史資料館技術主査) 木村幾多郎(九州大学講師)  
小林達雄(国学院大学助教授) 藤原宏志(宮崎大学助教授) 松下孝  
幸(長崎大学講師)ほか

空中写真測量指導 伊東太作(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター測量研究室  
主任研究官)

事務局 宮崎県教育委員会

教育長 後藤賢三郎、教育次長 内田琢也、同 船木 哲、文化課長  
井上鉄哉、課長補佐 佐野芳弘、庶務係長 島中 煉、主任主事 穂之  
上 昇(調査員)主幹兼埋蔵文化財係長 田中 茂、主任主事 岩永  
哲夫、同 面高哲郎、主事 永友良典、同 長津宗重、同 北郷泰道、  
同 菅付和樹、同 日高孝治、同 谷口武範(調査補助員)有田辰美  
蓑方政幾、高橋加奈子(埋蔵文化財センター整理専門員) 津隈久美子

調査協力 宮崎市教育委員会、清武町教育委員会、宮崎県産業開発青年隊

出土品整理 増田慈子、日野美智子、菊野悦子、富田優子、酒井晴子、長友玲子、  
手束千恵美、有田具子、勇 瑞枝、石川悦子、鳥越智子、佐藤穂治

(菅付和樹)

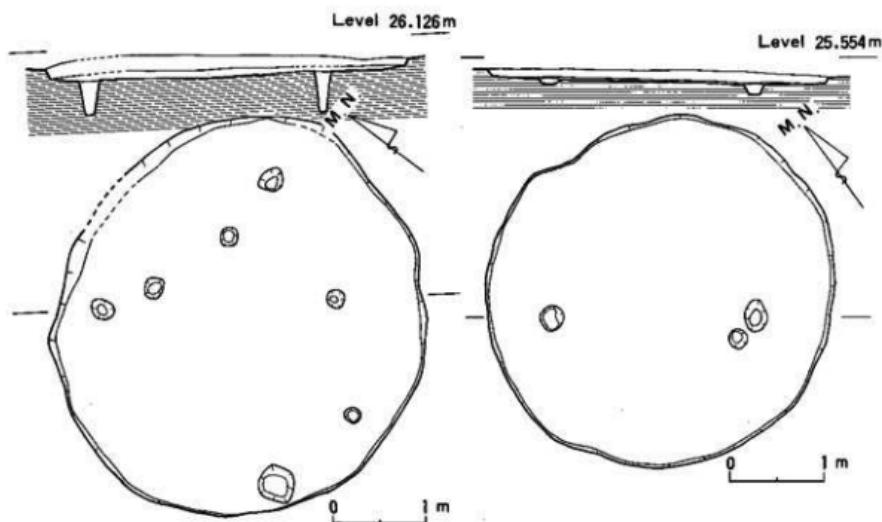
### III、調査の概要

#### 1. 平畠遺跡（10号地遺跡）

##### 調査区の設定と概要

調査の対象となったのは、分布調査及び試掘調査において範囲確認された平畠遺跡の中でも東端部にあたる約 20,000 m<sup>2</sup>である。現地の地形は南北の北高差が約 5 m ある傾斜地にあるため、調査は南北方向に 3 本のトレチを設定し、表土層の厚さと包含層の状態を確認した。その結果をもとに、重機により表土層を剥ぎ、地区設定の杭打ちを行った。

検出された遺構は、縄文後・晩期の住居跡に、平安時代を中心とする掘立柱建物跡などである。一方遺物は、縄文早期の押型文土器があるが、後、晩期を中心とした縄文土器が中心となり、その後は平安時代頃までの土器類などの遺物を欠き、掘立柱建物群の時期に出土遺物のもう一つのピークがある。



第3図 平畠遺跡 J-1号住居跡  
実測図（縮尺 1/80）

第4図 平畠遺跡 J-2号住居跡  
実測図（縮尺 1/80）

### 包含層の状態

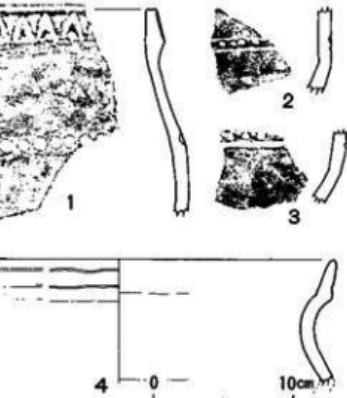
調査区は南北方向の高低差が約5mあり、畠地やみかん畑に使用されていたため、とくに高位部分の方が削平が著しく、北縁ではほとんどアカホヤ層も認められず、アカホヤ層下の土層まで削平された部分もあった。

縄文早期の押型文土器は、そうした削平された高位部分に認められた。基本的なアカホヤ層までの土層は次の通りである。

0・耕土(約14cm)、I・暗黒

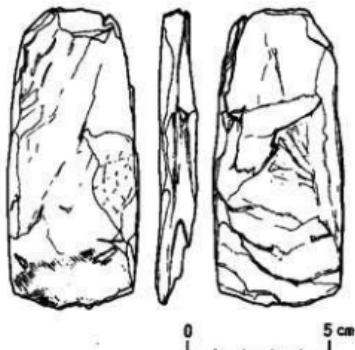
灰色土層(旧耕土。オレンジ色  
火山灰を少量含む。約20cm)、

II・黒色砂質土層(約16cm)、III・黒色シルト質硬質土層(微粒白色火山灰を含む。約7cm)、IV・漆黒色シルト質土層(布痕土器、須恵器、内黒土師器等の包含層。約14cm)、V



第5図 平畠遺跡J-1号住居出土  
縄文土器実測図・拓影(縮尺1/4)

・黒色シルト質土層(縄文後・晚期土器等の包含層。約14cm)、VI・アカホヤ層。アカホヤ層下の土層については、高位部分と低位部分、すなわち中位面IとIIでは差異が認められている。中位面Iでは暗褐色硬質土層となり、縄文早期土器の包含層である。中位面IIでは黒褐色硬質土層であり、遺物は認められていない。



第6図 平畠遺跡J-1号住居跡  
出土石斧実測図(縮尺1/2)

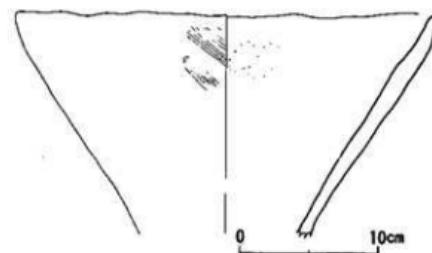
**遺構**  
縄文時代の遺構では、10基を超える竪穴住居跡が検出されているが、調査が年度末までに及んだため、正確な基数の確定は行

っていない。現在までに判明している10余基の竪穴住居跡は、すべて4m前後の円形プランである。1号住居跡（第3図）、2号住居跡（第4図）共に、二本柱が基本であったと思われるが、いま一つプラン的には明瞭さを欠いている。今後周辺地の調査により、一層明瞭な遺構が検出されることが望まれる。

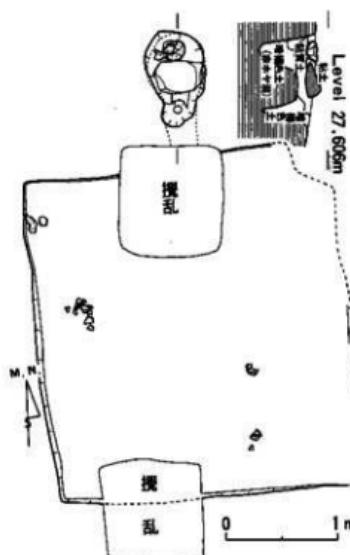
平安時代を中心とする竪穴住居跡及び掘立柱建物跡は、現在までに、竪穴住居跡4基、掘立柱建物跡6棟が確認されているが、最終的には増加すると思われる。竪穴住居跡は、煙出しをもつもの（第5図）などが注目され、7号地、19号地に次類例を加えることになった。また、掘立柱建物跡についても、数棟を単位に構成される屋敷内の構造が明らかになりつつあり、豊富な出土土器類も合わせて、当該期の様相が詳細に把握されるであろう。

### 遺 物

縄文早期の遺物としては、押型文土器片が出土しているが、主となるのは縄文後期からの遺物である。上限は、貝殻腹縁文を施す市来式、下弓田式系の土器が含まれ、下限には、松添貝塚にみる口縁下が肥厚化



第7図 平畠遺跡J-2号住居跡  
出土縄文土器実測図（縮尺1/4）



第8図 平畠遺跡1号住居跡  
実測図（縮尺1/50）

ないしは突帯化する土器が含まれているとみられる。

1号住居跡出土土器（第5図）と2号住居跡出土土器（第7図）との間には、時期的差異に帰すると思われる違いがある。1号住居跡出土土器は、第5図1、4にみられるように、口縁部から胴部にかけてが内彎し、胴部最大径から屈曲のみられる深鉢型土器が特徴である。それに対し、2号住居跡出土土器は、第7図の浅鉢形土器にみられるような、口縁部まで大きな屈曲のみられない粗製土器が主体的なものである。

ほかの遺物としては、石器では石錐、石斧（第6図）、石鏃、石匙等の出土があるが、注目されるものとしては、1号住居跡出土の管玉（硬玉製）、それに石刀の出土をあげておきたい。一方、平安時代の遺物では、土師器皿（へら切り底）、布痕土器、内黒土師、須恵器、鉄鏃などがある。

### ま と め

年度末に及ぶ調査のため、成果の充分な検討も進んでいない段階であり、メモ的な所見に留まるが、縄文土器の編年的位置付けについて若干の見通しを述べておきたい。

県内あるいは南九州における縄文後・晩期の土器編年は、下弓田式（あるいは市来式、草野式）一陣内式一松添式と從来位置付けられてきたが、地域的にみれば陣内式は県北の遺跡を標識とするもので、土器の内容からも三万田式、御領式といった系譜を受け、前後の下弓田式及び松添式などの県南の様相とは異質なものであった。今回、平畠遺跡において検出された土器群は、まさに県南における陣内式に併行する空白を埋め、つなぐものとしての位置を与えられようと思う。ただ、松添式がより貝殻文土器の残影を強くとどめるのに対し、平畠遺跡におけるそれは、主たるものでなり得ていないところに、本遺跡出土の土器群に課せられた課題があろうと思う。

（北郷泰道）

## 2. 堂地東遺跡（11号地遺跡）（第2次調査）

### 調査区の設定と概要

今年度の調査は、昭和55年度第1次調査が行われた地区の北側に隣接する斜面及びそれに続く水田面と、東側に緩斜面として広がる畑地を対象に行った。<sup>(1)</sup>

調査を行うにあたり、まず、全体を地形にあわせて東側よりI～X区に区分し、それについて包含層の状態を見るために $2\text{m} \times 5\text{m}$ のトレンチ調査を行った。その結果、包含層の残存状態からI～IV・VII区を対照に調査を行うこととした。アカホヤ上面で検出できた遺構は、掘立柱建物・溝状遺構・井戸・近世墓・石塔群・竪穴式住居跡等があげられる。また遺物は、表探段階では糸切り底の土師器が大半であったが、他にヘラ切り底の土師器、須恵器、陶磁器、硯、弥生土器、縄文土器、磨製石斧等の出土も見られた。

### 包含層の状態

基本層序は、第1次調査とほぼ同様で、耕作土・黒色土層、アカホヤ層の順であった。今回調査で得られた遺物は、その大半が黒色土層より出土したものであったが、区域によつては、耕作等によって黒色土層、アカホヤ層が削られている所もあり、VII・IX区では急傾斜のためアカホヤ層の直下に裸層があらわれる所もあった。尚、今回興味深かったのは、部分的にではあるが、黒色土層がIII層に区分できることと、II、III区で検出された溝状遺構の埋土に火山灰質の土層が見られたことである。

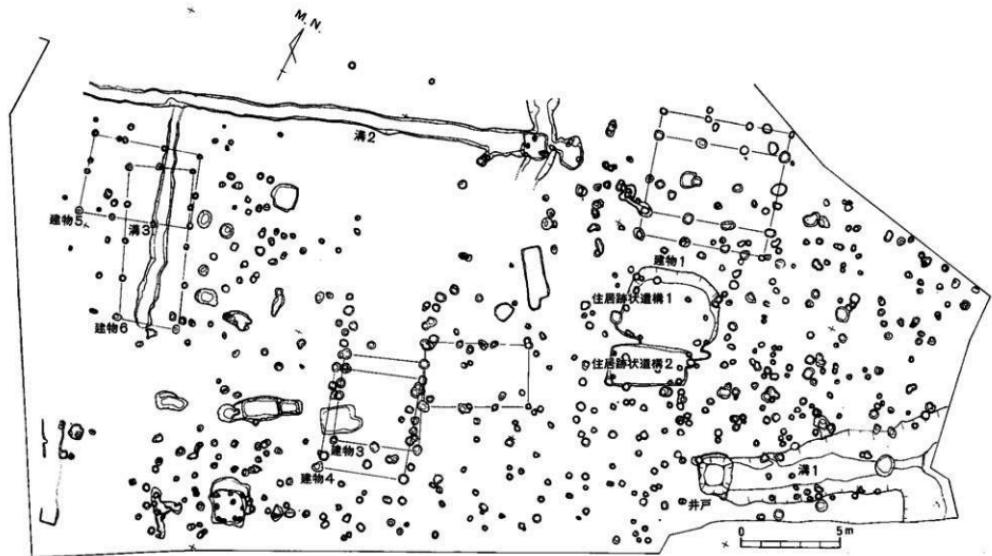
## 遺 構

### 掘立柱建物

掘立柱建物はI区（第10図）に集中しており計6棟が確認された。内訳は2間×3間-2棟、2間×2間-2棟、2間×4間-1棟、また掘立柱建物1のように2間×3間の両側に半間の庇を持つものも存在した。

### 溝状遺構

溝状遺構は、I～IV区に計12本が確認された。その中で、溝4が一番規模が大きく、II～III区にかけて東西に走り、II区では直角に曲っており、IV区の溝12との関連も考えられる。また、IV区の溝は石塔群のすぐ北側を走っており、石塔群の区画性との関連も考える必要があると思われる。また、その他に溝1、9のように「道」としての機能が考えられるものも存在した。



第9図 當地東遺跡I区遺構分布図 (縮尺1/200)

### 井 戸（第10図）

I区の南側に存在し、プランとしては上方で方形を呈し途中より円形になり底に至るものであり、規模は1.9m×1.7m、深さ3.6mである。出土遺物は、土師器、陶磁器であり、炭化物も多量に出土した。井筒は確認されなかった。

### 石 塔 群

IV区の南側に存在するもので、果樹園開墾の際に動かしたらしく、地輪より上の部分はほとんど原位置を保っていなかったが、地輪は原位置を保っているものが多く30~40基が確認できた。他に紀年のない板碑が2基出土している。また当遺跡でも、昨年度調査を行った23号地と同様に石塔の周囲には径15cm大の川原石が敷きつめてあった。

### 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は、2軒検出されているが、第1次調査で1軒確認されているので、今回はその後を受けて2号、3号とした。

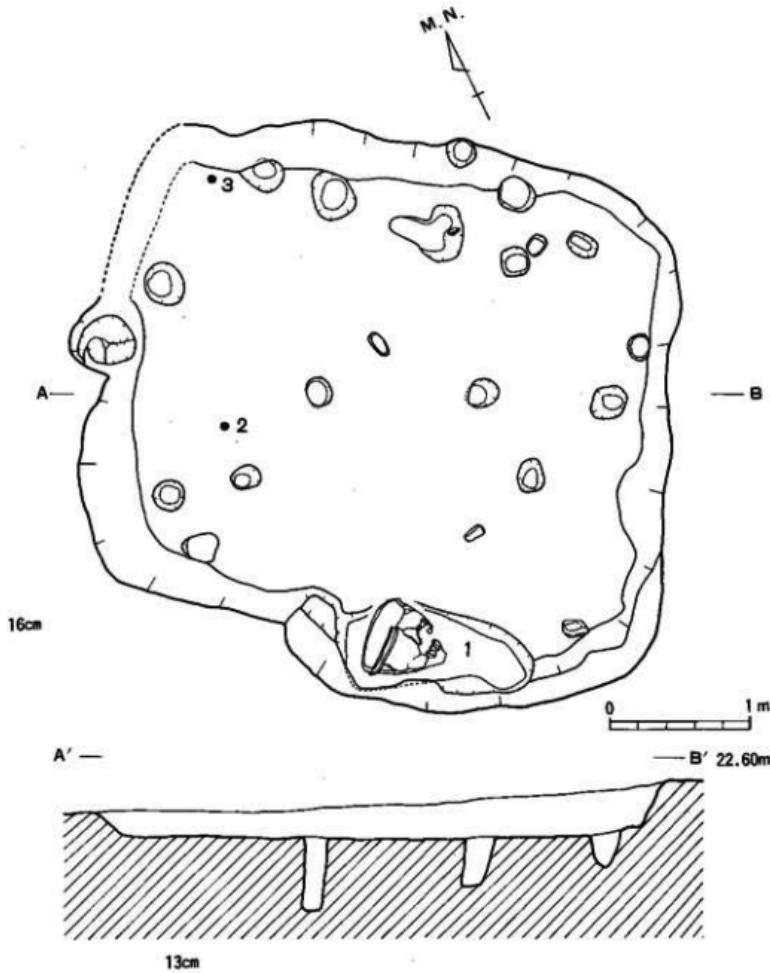
2号住居跡（第9図）はⅣ区で確認されたもので南北～3.6m、東西～4.0mをはかる。基本プランは方形で南側に壇を置く場所が1つ張り出している。主柱穴は2本である。尚この住居跡からは、弥生中期後半と思われる土器及び石斧が出土している。

3号住居跡は、1号より西の台地縁辺部のⅣ区にあり、南北～4.5m、東西～5.2mを計ることができるが、プランは不定形である。尚、この住居跡からは、弥生後期の土器が出土している。

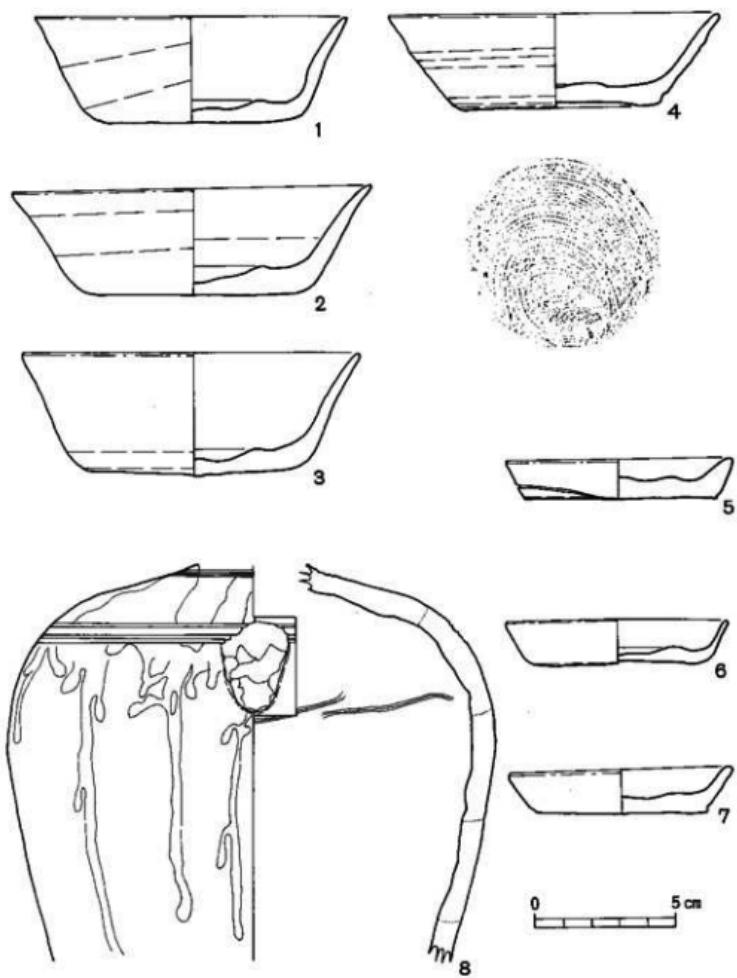
またI区（第10図）の中央部には、南北～3.7m、東西～4.7mの隅丸方形と長辺～4.0m、短辺～2.1mの長方形プランとの切り合いの落ち込みが検出されたが、床面等々の状況からみて、住居跡とは考えにくいため、ここでは住居跡状造構1・2とした。

### 近世 墓

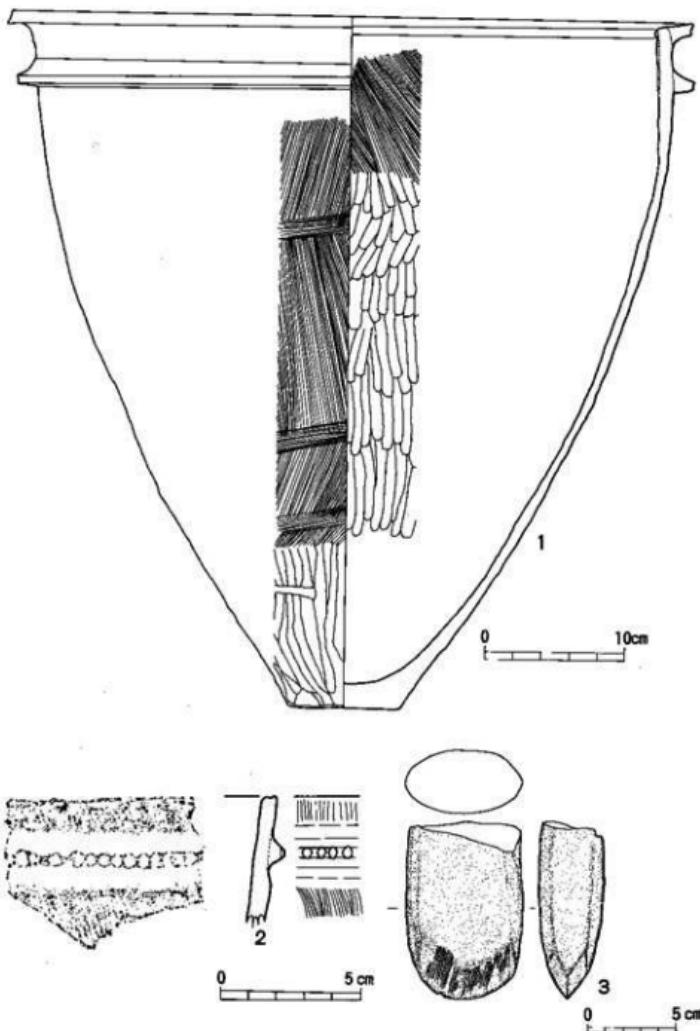
II区の中央部に存在し、墓壙は14基確認することができた。この墓壙の中央部に石塔類を埋め込んだ二次的集石があり、その中に江戸時代後半（寛政年間）の紀年の入った墓石が出土した。（墓壙の説明は付編表？）



第10図 堂地東遺跡 2号住居跡実測図（1～3 第12図 遺物）（縮尺 1／40）



第11図 堂地東遺跡出土土器実測図（縮尺1／2）



第12図 堂地東遺跡 2号住居跡出土遺物実測図  
 (1.縮尺1/4, 2.縮尺1/2, 3.縮尺1/3)

## 遺物

出土した土師器の大半が糸切り底であるが、II区の西側の黒色土層内に固くなつた層がありその直上からヘラ切り底の土師器が集中して出土している。第11図1～3・5～7はいずれもヘラ切り底である。1～3が壺で5～6が小皿である。胎土は精選されており、焼成も良好である。また2・3・5・6には底部に板目が残っている。4は糸切底であり、胎土は精選されており、焼成は良好である。8は古瀬戸の水注でIV区より出土している。第12図の1～3はVII区の2号住居跡（第10図）からの出土遺物である。第12図1は弥生土器の壺ではほぼ完形である。器高～49cm、口径～43cmで調整はヘラ及びハケで行われているが、風化が激しく、部分的にしか残っていないかった。胎土には石英・雲母粒、1～2mmの大いな小石を含み、焼成は普通である。また突帯の先端部分には若干のくぼみを持っている。2は下城式の口縁部で突帯の上下にはハケ目が残っており、上部ではその上に横ナデを行っている。内面はナデによる調整を行っている。胎土には石英が含まれており、よく精選されている。焼成は良好である。尚外側には、煤の付着が認められる。3は砂岩製の磨製石斧である。その他、縄文土器・須恵器・常滑焼・備前焼・青磁・染付・磨製石鎌・石製鏡・銅鏡の類も出土している。

## まとめ

堂地東（11号地）遺跡は、縄文期～江戸期まで時代的にかなりの幅があり、遺構的にもばらつきがあったが、弥生中期後半と後期の住居跡各1軒、掘立柱建物6棟、室町～江戸期の石塔群、近世墓が検出された。特に3号住居跡は、14号地、20号地に続いて検出された内側に複数の突出部を有する「日向型間仕切り住居」である。土師器は、ヘラ切り底と糸切り底の2種があるが、II区の固層上のヘラ切り底の壺は法量及び技法から御笠川南条坊遺跡のI～2C類に相当し10世紀中頃～後半に比定される。糸切り底は12～14世紀代に比定される。<sup>(3)</sup> I区の掘立柱建物1は、南北に庇を有する構造、当地の字が「堂地」である点、近接して近世墓と石塔群がある点を総合的に考えると「御堂」が想定される。IV区の石塔群は、紀年を有する五輪塔及び板碑はないが、五輪塔のタイプが23号地と同じであり、隣接地に享禄4（1531）年の宝塔や天正17（1589）年の板碑があることから室町～江戸期に比定される。<sup>(4)</sup> IV区出土の古瀬戸の水注は鎌倉時代後半に比定されるが、原位置を保つ地輪の下部にも破片が入っているので、石塔群には伴なわない。II区の江戸後期の近世墓は「墓道」が想定される溝の末端の両側に3号墓と4号墓を中心計14基営まれており、一族の墓地と推定される。以上のように、11号地は惡条件の立地の限られた地域だけの調査のため弥生期の集落の構

造を追求することはできなかったが、「御堂」を含めた近世墓の構造及びその背後にある社会を文献史料によって補強し追求していきたい。

(長津宗重、日高孝治)

- 註(1) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅰ)」 1980
- (2) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅱ)」 1981
- (3) 前川威洋他「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2~8集 1975~79
- (4) 井上喜久男編「潮戸編図表」(『世界陶磁全集3』) 1977

### 3. 熊野原遺跡（14号地遺跡）(第2次調査)

#### 〈B 地区〉

##### 調査区の設定と概要

熊野原遺跡（旧14号地遺跡）は、昨年度A地区の発掘調査を行い、弥生時代終末期の方形周溝墓等を検出したが、本年度は市道を挟んでその西隣りのB地区約12,000m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。

B地区は、北側に谷底低地をひかえた標高約14mの台地の縁辺部に位置し、北側低地との比高差は約1.5m～4mである。B地区北端の畠地は、谷底低地に半ば突出した小段丘上に営まれ、昭和56年度の試掘調査の際は調査対象から外されていたが、幹線道路建設予定地として東西3本、南北2本のトレンチによる試掘を行ったところ、造構状の落ち込みが検出された。そこで、直角座標系の北に合わせて4×4mのグリッドを設定し、面的発掘を実施した結果、住居跡群が確認された。表土下の黒色土層は非常に薄く、第3層の赤褐色土層（アカホヤ層）まで深耕による影響がみられた。基本的な層序は、学園内の他の遺跡と同じである。アカホヤ層面で検出された。これらの造構は上部を削平されたり、或いは床面に達する擾乱を受けていたが、幸いにして遺存状態のよい造構もあり、擾乱を受けたものも上下方向の擾乱のみで造構の形態等は確認できた。

造構の分布状況としては、B地区南・中部に溝状造構が検出され、北部には掘立柱建物跡群及び住居跡群や土壤が検出された。

##### 造 構（第13図）

検出された造構は、溝状造構が3条、掘立柱建物跡が5棟、住居跡が9軒、土壤が1基、住居跡の残欠と思われる造構が1軒である。

溝状造構は黒色土層中から掘り込まれている。明確な共伴遺物もなく、また、この造構に関連する様な造構も見られないため、その性格や時期については不明である。

掘立柱建物跡は、建1、建5が1間（約3m20cm）×3間（1間約1m60cm）で長軸は東西方向、建2が2間（1間約1m60cm）×3間（約1m60cm）で南北方向を指す。また、建3は2間（約1m55cm）×3間（約2m）、建4は1間（約3m10cm）×3間（約2m）で共に東西方向である。柱穴に伴う遺物の出土はない。なお、建5の一部は道路下にかかるため未発掘である。

住居跡はB地区北端部に集中して検出された。円形と方形の平面プランを基調にして、壁

の一部分が内側へ突出する形態のもの、突出壁のないものが見られた。突出壁のあるもののうち、1号と8号は円形プランで4～5個の柱穴を有し、突出壁は7～8カ所、それによって区画される空間は7～8個である。直径は約6m60cm～7mで8号の方が大きい。また、3号と7号は共に方形プランで2カ所の突出壁を持つが、柱穴数は3号が4個、7号が2個であり、規模も3号の約5m20cm平方に比して7号は約4m60cm平方と小型である。4号は方形プランに4個の柱穴と1カ所の突出壁を持ち、約6m60cm×6m20cmの規模である。床面の北東及び西側には灰や焼土が廃棄してあった。6号は方形プランで柱穴が2個あり、壁の突出はみられない。約3m80cm平方と小型である。9号は北側を通路により破壊され半分遺存していただけであるが、6号と同タイプの住居跡と考えられる。柱穴は2個、南辺が約3m60cmを測る。5号は、数十年前の天然ガス用ボーリング調査の際に、半分が破壊されている。1個の柱穴と1カ所の突出壁が残っているが、7号と同タイプのものと推定される。北辺は約4m60cmを測る。1号土壤は、約3m40cm×2m60cmの隅丸長方形である。床面西側には、直径1m前後の軽石を多量に含む枕状の土壤があり、他の住居跡に比べると遺物に相違が見られた。

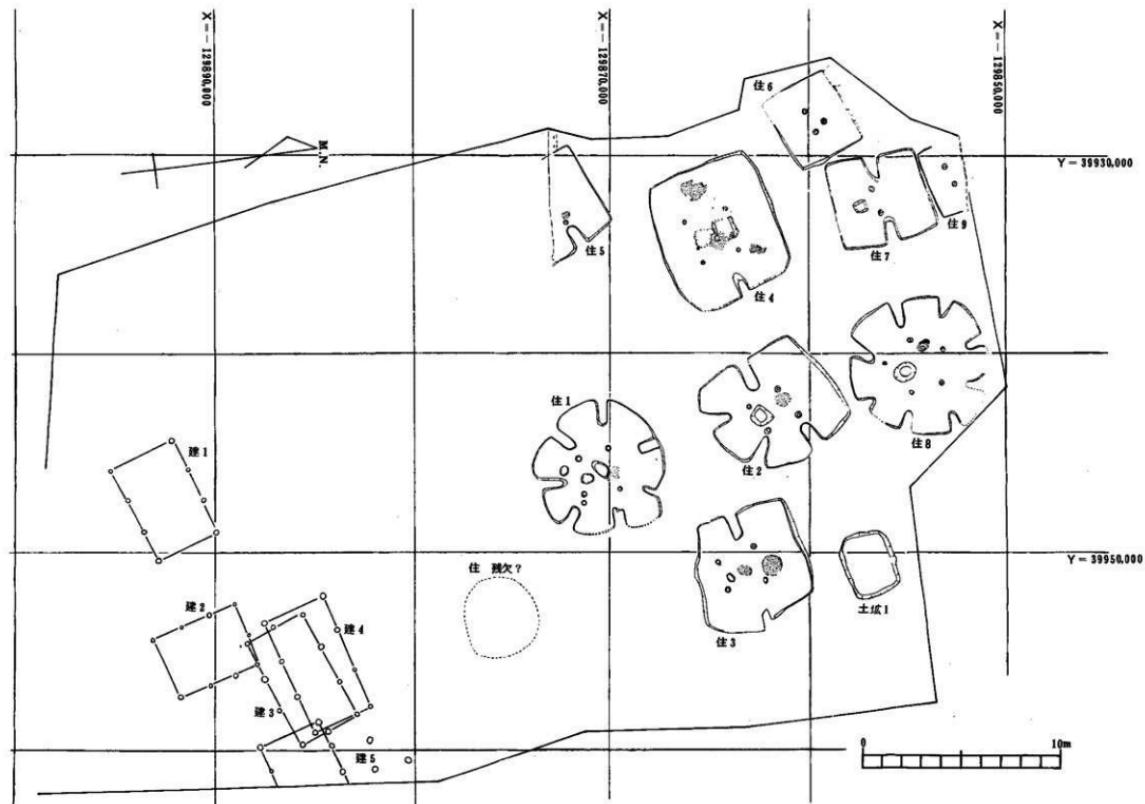
これらの遺構はいずれも上部をかなり削平されており、本来の形態はつかめなかった。<sup>(1)</sup>半数以上の住居跡の床面中央付近には掘り込みがあり、その周囲に焼土の堆積が共通して見られた。

註(1) 過日、鹿児島県鹿屋市の王子遺跡を見学させていただいたが、ここでは同形態の住居跡がほぼ完全な形で検出されており、1m前後の高さに残る壁面の一部がその壁面と同じ高さ（或いは床面から $\frac{2}{3}$ 程の高さ）から内側へ突出したようになり出されていた。これがこの種の住居跡の本来の形態であろう。なお、この種の住居跡がその集落内において普遍的なものか特殊なものかは未だ判別し難いが、少なくとも祝吉遺跡、熊野原遺跡B地区においては普遍的なものといえよう。

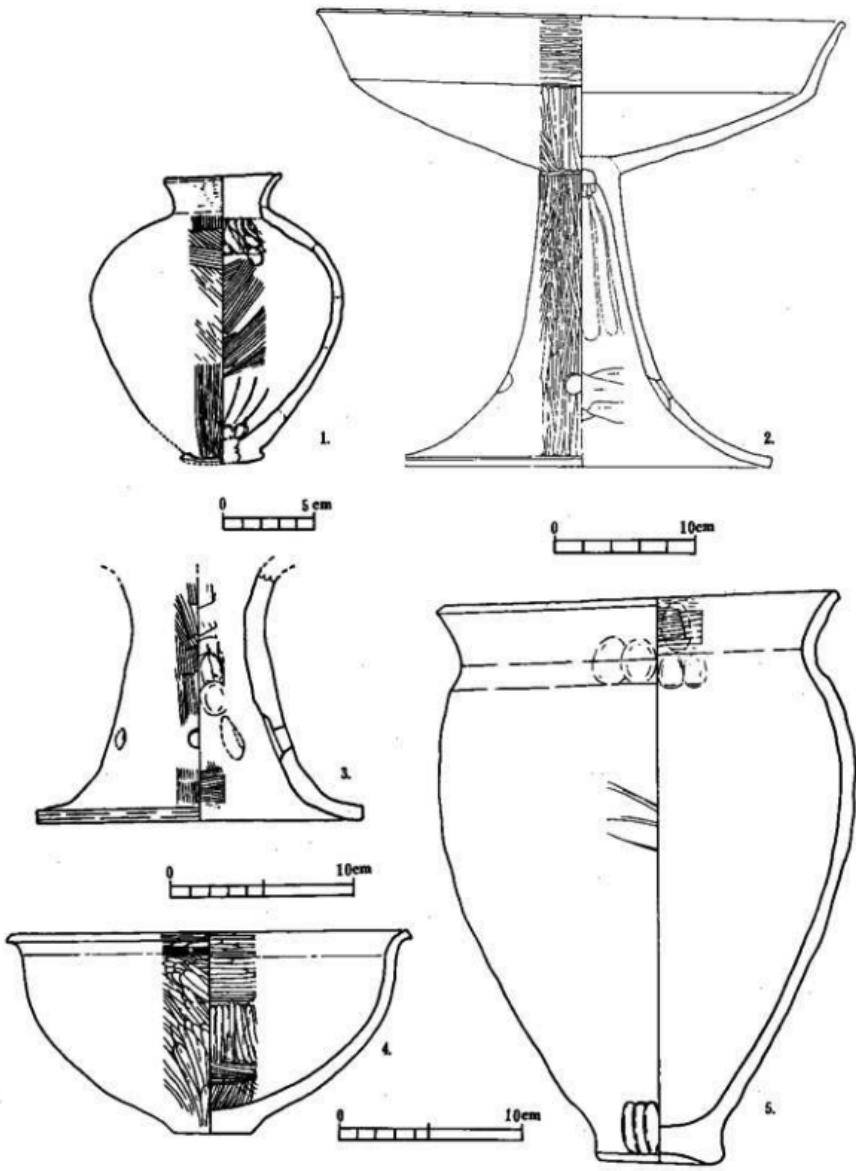
快く見学を許可してくださった王子遺跡の関係者の方々に深甚の謝意を表します。

#### 遺 物（第14図～第15図）

遺物は耕作によってかなり移動したものと思われたが、それでも住居跡の多くは、床面付近に数個の完形土器を含む多数の土器片が遺存していた。また、5号住居跡は特に遺物の量が多く、数十個体の完形土器が出土している。1号土壤も割合残りがよく、60cm程の深さで



第18図 燕野原遺跡B地区遺構分布図 (縮尺1/200)



第14図 熊野原遺跡B地区住居跡出土土器実測図（縮尺1/3, 但し2は1/4）

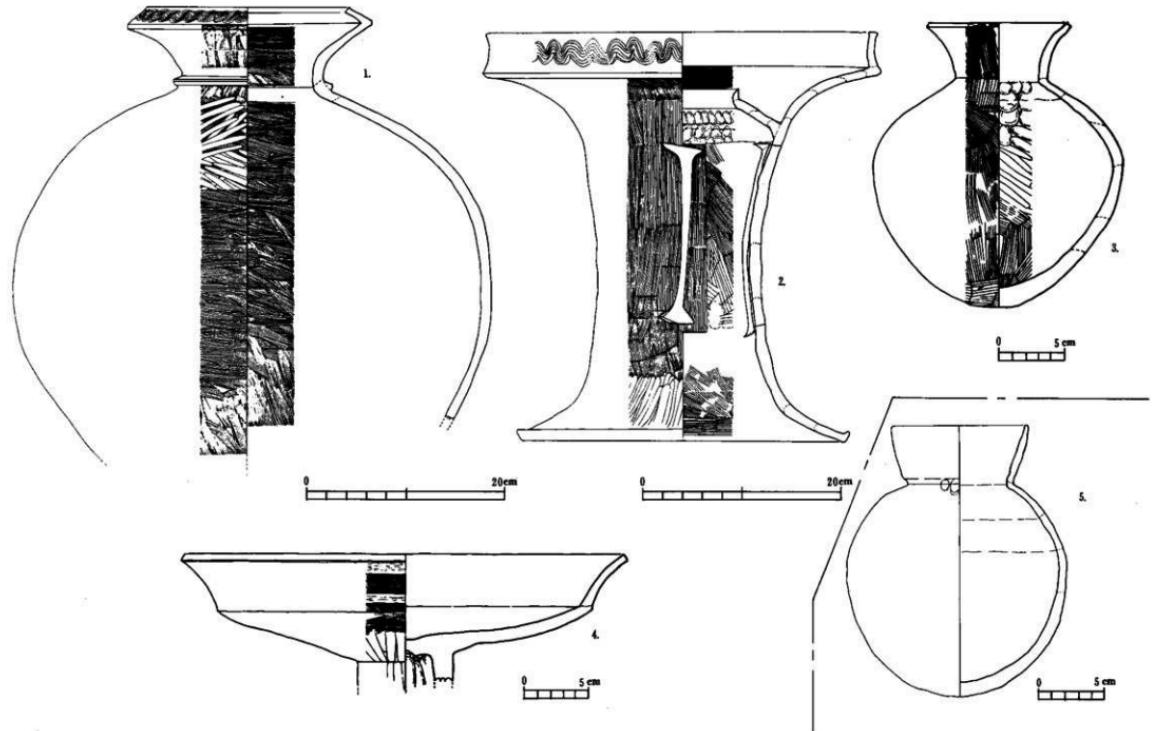
遺存していたために多量の遺物が出土している。表土からは土錐や土師器片等が採集されているが、遺構には伴わず、或いは掘立柱建物跡の時期に伴うものかもしれない。これらの遺物は現在整理中であり、詳細な検討は本報告に譲るとして、今回は主な土器のみ取り上げたい。

第14図1は、1号住居跡出土の壺形土器である。口縁部径6.1cm、推定高15.5cmを測り、底部が平底である。口縁部のナデや肩部・胴部下半のハケ目が明瞭である。2は、3号住居跡出土の高環である。突出壁の北側から完形のまま押し潰れた状態で出土した。全面にヘラによる磨きがかかり、脚部に4個の透孔がある。口縁部径は37.3cm、高さ32.2cmを測る。3号住居跡からは丸底の壺形土器片も出土している。3・4は、4号住居跡出土の鼓状器台と鉢形土器である。3は、推定5個の透孔を有し、口縁部は横に広がると思われる。裾部径は17.6cmを測る。4は、全面ヘラ磨きされており、口縁部端は外反する。口縁部径21.3cm、高さ10.8cmを測る。5は、6号住居跡出土の壺形土器である。頸部から肩部にかけて軽い稜をなしてくびれ、底部は低い上げ底である。口縁部径20.9cm、高さ30.6cm。

第15図1～4は最も遺物出土量の多かった5号住居跡出土の遺物である。1は、二重口縁の壺形土器で頸部に1条の突帯を巡らし、口縁部はかなり内傾する。口縁部径20.1cm、胴部最大径48.0cmを測る。2は、大型の器台で、口縁部径39.4cm、裾部径32.5cm、高さ41.4cmを測る。胴部には退化した透しが3カ所ある。この種の特殊器台は県内では出土例がなく、隣りの大分県大分市多武尾遺跡に類例がみられる。<sup>(1)</sup>3は、ハケ目の明瞭な壺形土器で、丸底に近い平底の底部を持つ。口縁部径は10.6cm、高さ21.5cm。4は、环部中位に稜を有し、横へ広がる口縁を持つ高環である。口縁部径33.4cmを測る。5号住居跡からは、この他に壺形土器や長頸壺、数種類の貝殻が入っていた壺形土器等多彩な遺物が出土している。また、7号住居跡からは有柄の磨製石鎌が出土している。

第15図5は、1号土壤出土の壺形土器である。口縁部が直立し、底部は丸底である。口縁部径10.2cm、高さ20.5cmを測る。1号土壤出土の土器は、住居跡群の遺物とは異なり、明らかに土師器としての様相を呈するものである。土壤からは、他に勾玉を含む玉類が出土している。

註(1) 多武尾遺跡の現地説明会資料に丸い透しのある大型の特殊器台が掲載されている。昭和57年1月に大分市を訪れた際、多武尾遺跡はまだ発掘調査中であった。



第15図 熊野原遺跡B地区 5号・6号住居跡出土土器実測図 (1・2縮尺1/4, 3・4・5縮尺1/3)

## まとめ

本年度調査を実施した熊野原遺跡B地区は、先述したように検出された遺構の殆どが台地の北端部に集中していた。住居跡群のうち、6号・9号等方形プランの小型の住居跡は、さらに谷底低地の方へ下ると思われ、既に今回発掘した区域と谷底低地との間の段丘端部及びその下位の微高地において、試掘の結果、方形プランと考えられる遺構が検出されている。

また、方形や円形の平面プランを基調にして、壁の一部が内側の居住空間へ障壁のように突出する形態の住居跡は、既に宮崎県都城市の祝吉遺跡などで確認されており、突出壁の機能としては、祝吉遺跡の報告の中で北郷・面高が指摘している様に、内部空間の間仕切り的な機能を持つものと考えられている。<sup>(1)</sup>これららの壁の機能を結果的に強化する役割を果たすと考えられるものに、突出壁と主柱穴との位置関係があげられよう。主柱穴が突出壁の先端近くに位置する場合、その間隙の通行が不可能に近い状況が作り出され、間仕切り的な機能がさらに高められていると言えよう。しかしながら、内部突出壁と主柱穴との対応関係が明確な例は数少なく、必ずしも普遍的なものではない。<sup>(2)</sup>この種の機能を有する内部突出壁を持つ住居跡は、現在までのところ、旧日向国にのみその分布が限られている。<sup>(3)</sup>現在、遺物は整理中であり、遺物の検討やその出土状態、住居跡の規模や柱穴数の問題等も残されている現時点で、このB地区の住居跡群の中の各先後関係を明言することはできないが、1号→3号→4・5号→6号……→1号土壙という変遷は、一応想定される。住居跡群の時期については、弥生時代後期後葉～終末期にかけて営まれたものと思われる。昨年度調査したA地区において検出された終末期の土器を伴う周溝墓や住居跡との関連なども合わせて、これらについても遺物・図面の整理を待って今後検討してゆきたい。<sup>(4)</sup>

今回検出された掘立柱建物跡は柱の間隔により建1、建2、建5の3棟と、建3、建4の2棟に分類出来るが、A地区で検出された1間（約3m45cm）×3間（1間約1m80cm）の掘立柱建物跡はこのどちらにも入らず、長軸方向のみ建2と同じである。周辺の平畠、堂地東、前原南、前原北等の各遺跡の同種の遺構とも考え合わせた上で、建物相互の関係や建物の配置による村落の復元、時期比定など今後の検討課題としたい。

（菅付和樹）

註(1) このタイプの住居跡は、他には宮崎県内で同じく都城市的丸谷第I遺跡、高崎町上示野原遺跡、野尻町大蔵遺跡において報告され、また、未報告の例では宮崎市の宮崎学園都市20号地遺跡（前原北遺跡）A地区や新富町新田原遺跡

(総合博物館の山中悦雄氏の御教示による)においても検出されている。  
県外の例としては、鹿児島県隼人町の小田遺跡が報告されており、同県鹿屋市  
の王子遺跡でも同タイプの遺構が検出されている(同遺跡現地説明会資料によ  
る)。

(2) 北都秦道『祝吉遺跡』第1集 都城市教育委員会 1981年

山高哲郎『祝吉遺跡』第2集 同 上 1982年

において、石器工房区或いは祭祀に関連する区画の存在を想定している。また、  
前述の山中氏によると、新田原遺跡では壁面に沿ってベット状遺構が設けられ  
ていたが、この内部に突出する壁によってベッド状遺構が区切られていたとい  
う。類似の構造は丸谷第1遺跡や祝吉遺跡(2次調査)でも確認されている。

(3) 前述の新田原遺跡にこの対応関係の顕著な住居跡の例がある。その他の例は、

突出壁と柱穴との対応関係が部分的なもの(2~3対)が多い。

(4) 『続日本紀』における日向国の意味で、大隅国も含めたもの。

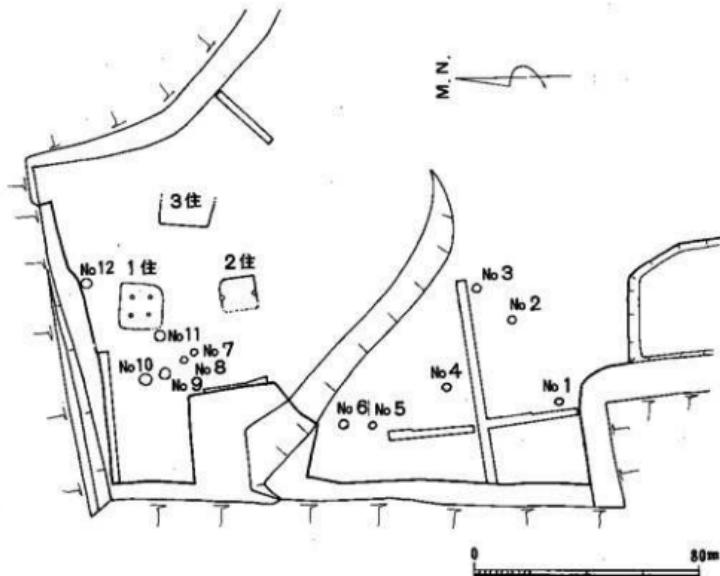
(5) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅱ)』宮崎県教育委員会 1981年を  
参照。

#### 4. 前原西遺跡B地区（16号地遺跡）（第2次調査）

##### 調査区の設定と概要

前原西遺跡B地区は、東へ延びる台地の北縁中ほどにあり、当台地中では高所にあたる。標高は約17mで、眼下の田上川流域に形成された沖積地との比高差は約6mである。遺跡の西は、既に3mほど削平を受けていたので4,500m<sup>2</sup>を調査対象面積とし、全面を発掘調査した。調査区内の北、台地の縁辺部は一段低くなっていたので、調査区を北区と南区に分けて調査を行う。その結果、南区西部において縄文早期の集石遺構6基、北区においては、縄文早期の集石遺構6基の他、弥生終末～古墳初頭の堅穴住居跡3軒が検出された。また、南区においては、マイクロ・コアやブレイド等の旧石器も出土している。

昨年度調査され、14世紀末～15世紀初頭の周溝墓が発見されたA地区は、B地区の南に位置し、南面する緩斜面である。B地区においても同時期の遺構等の存在が予想されたが、今回の調査では、中世の遺構等は発見されていない。



第16図 前原西遺跡B地区遺構分布図（縮尺1/200）

### 包含層の状態

B地区の基本層序は、第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層が赤ホヤ（第1オレンジ）、第Ⅳ層が黒褐色ロームである。第Ⅴ層は、小白斑ローム層とも呼ばれる層で、石英、長石の小さな白色斑点が見られる硬質のローム層である。第Ⅵ層は褐色ローム、第Ⅶ層は2次シラスで上層は褐色を呈している。遺物包含層は、縄文早期が第Ⅳ層黒褐色ローム層で、弥生終末～古墳初頭は第Ⅱ層黒色土である。後者の堅穴住居跡は、第Ⅲ層赤ホヤ層及び第Ⅳ層黒褐色ローム層に掘り込まれている。旧石器時代の包含層は、第Ⅴ層褐色ローム層下層及び第Ⅵ層2次シラス上層である。

B地区は、以前みかん園であり、その造成により、南区東半及び西端は、表土下は2次シラスとなっており、中ほどから西にかけて赤ホヤ、黒褐色ロームが残存しているのみであった。また、北区においても赤ホヤないし黒褐色ローム層の上面まで削平を受けていた。

山	山	山
I 表 土		
II 黒 色 土		
III 赤 ホ ヤ		
IV 黒褐色ローム		
V 褐色ローム		
VI 2次シラス		

第17図 前原西遺跡  
B地区基本層序

### 縄文時代

#### 遺構

縄文時代の遺構は、北区において6基検出された。当区は、みかん園造成のため赤ホヤ層ないし黒褐色ローム層の上面まで削平を受けていたが、包含層にはあまり影響を与えていない。集石遺構はほぼ完全な状態であった。北区において検出された6基の集石遺構のうち5基はまとまりを示し、1基は6mを距離をおいていた。5基の集石遺構直上には、拳大を最大とする焼けた石礫が面的に拡がり、しかも厚さ10cmほどに層状をなしている。

南区においても6基の集石遺構が検出されたが、北区の場合のようにまとまりは認められなかった。また、北区で見られた角礫の層ではなく、わずかに北緩斜面で角礫の散石が見られた。これは、南区がみかん園造成の際、削平が黒褐色ローム層にまで及んでいたため、角礫の層は消滅していたとも考えられるが確証はない。

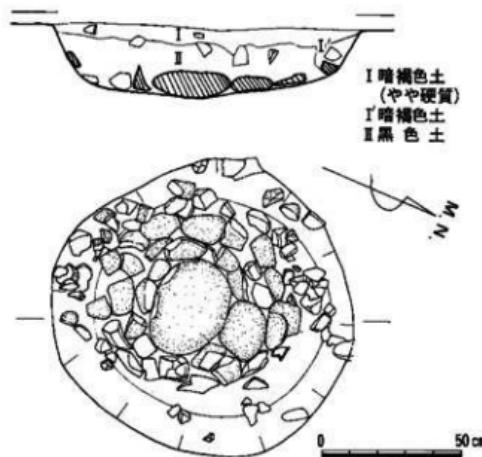
B地区で検出された12基の集石遺構の土壤は、径が120cmから60cmあり、深さは10cmから

20cmと浅いものである。土壌内には、大半が焼けた角礫がはいり、中には底面に配石を伴う集石造構もある。

10号集石造構は、径約120cm、深さ25cmの土壌を伴う。土壌内の角礫の量は少ないが、底面に配石がされている。配石は、長径35cm、短径27cmの楕円形の偏平な河原石を中心部におき、その周囲を10数cmの角礫で2重ないし3重に取り巻き、さらにその外側の土壌斜部を10cm以下の角礫を配石している。配石された石は、火を受けた痕跡があり、また、配石上では炭化物も検出された。10号集石造構は炉として使用されたものと推定される。

12号集石造構は、浅い土壌で底面に配石を伴うが、火を受けた痕跡が認められず、また、炭化物も出土していない。炉として使用されたかについては疑問が残る。

7号から9号の集石造構は、土壌内の角礫の量がわずかで配石も伴わないので集石造構と呼ぶのは不適当とも考えられたが、土壌が角礫の層の下で検出されたことなどから、ここでは集石造構としておきたい。



第18図 前原西遺跡B地区第10号集石造構実測図(縮尺1/20)

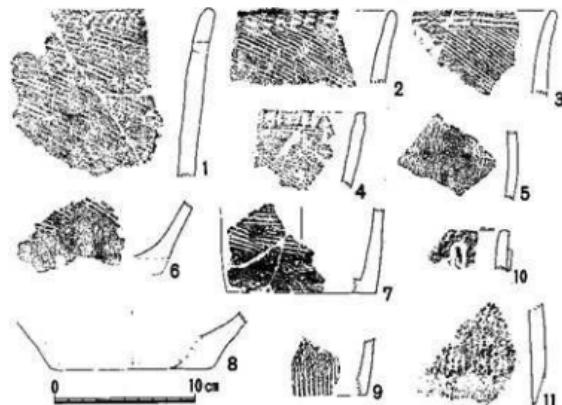
### 遺物 (第19図)

集石造構周辺において、土器や石器が出土している。その量は多くはないが、北区において角礫の屑中及びその直上から出土している。土器には縄文早期の貝殻文、撓糸文、押型文(山形)があり、貝殻文土器が主体で撓糸文等は数点出土したのみである。石器は、石鏃(6)、磨石片(1)が出上している。

貝殻文土器に、文様より2種に分類できる。1つは、胴部に斜方向の貝殻条痕文をもち、口縁直下に連続貝殻刺突文等をもつもの1~4、1つは、口縁下に楔形凸帯をもち、凸帯間及び胴部に貝殻刺突線文をもつもの10・11がある。前者の出土量は多く、口縁直下の施文法はバラエティーに富んでいる。A—貝殻施文貝による連続刺突文(1、2)、B—貝殻施文具による連続平行線文(3)、C—ヘラ様施文具による連続斜短線文(4)、D—ヘラ様施文具による連続短線文等があり、これらは、前平式土器と呼ばれる土器に類似する。特にCとDは酷似するが、A、Bは、文様帶が口縁端に接せず、また、口唇部も丸くおさめられており、細部において若干異なっている。

5は、塞ノ神a式と呼ばれるもので網目文がベルト状に施文されている。

(高 哲 郎)



第19図 前原西遺跡B地区出土遺物実測図(縮尺1/4)

## 弥生時代

### 遺構

B地区の北側から竪穴住居跡が3軒分検出された。いずれも上層の黒色土層は削り取られ赤ホヤ層からの検出であり、保存状態は悪い。調査順に1号、2号、3号とする。

1号住居跡は方形状を呈し、 $5.3 \times 5.8$ mの規模を有していた。柱穴は4個、南寄りに炉跡とみられる炭化物を含む窪みが確認できた。

2号住居跡（第20図）は基本的には方形であるが、不整形を呈し、西半部分は新しい時期の溝状造構によって切られ、全体としても床面のみが残る状況であった。1辺3.5mほどの小型のもので、柱穴は南および北の隅に各1個であった。遺物は床面直上に割にまとまって出土した。

3号住居跡は方形状を呈し、東への傾斜面に位置することから東半部は欠失していた。1辺4mほどの規模で、柱穴は未確認である。

### 遺物

全体的に保存状況も悪く、遺物の量も少ない。

1号から壺形土器、甕形土器の出土がみられたが、破片が多く、完形にはならない。

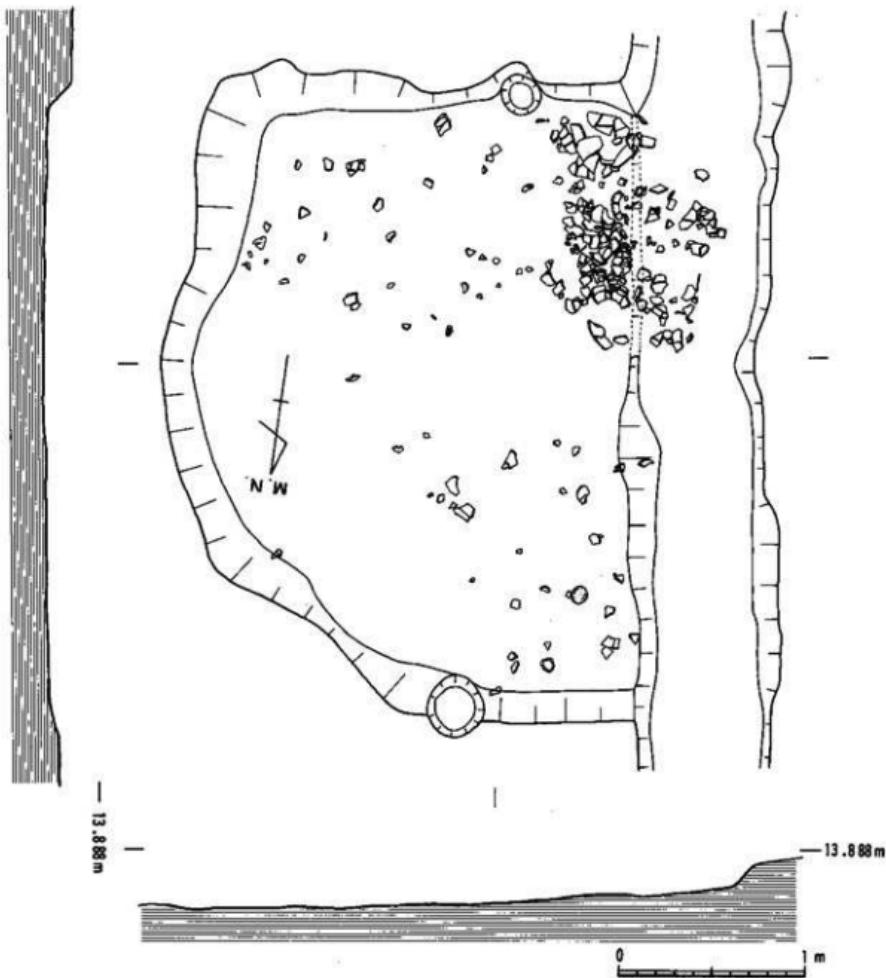
2号からは壺形、甕形、高坏形の土器および磨石が出土している。壺形土器（第21図1）は最大径を胴中央部にもち、肩を張らずに頸部へ至り、口縁部はゆるく外反している。口縁部はヨコナデ、体部はハケメのあと、みがきがみられる。口径13cmをはかる。

3号からは壺形、甕形、高坏形、鉢形土器が出土している。鉢形土器（第21図2、3）は上げ底気味の平底で、開きながらまっすぐ立ち上がり口縁部へ至る小型の土器である。

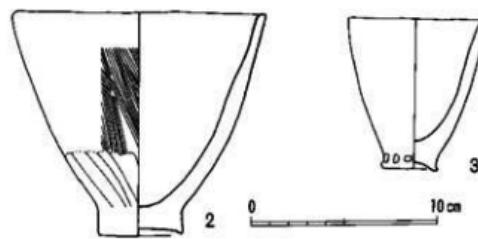
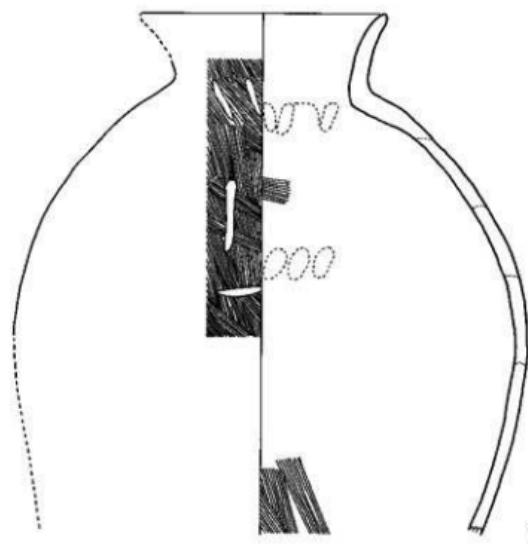
焼成は良く、胎土には多くの砂粒を含んでいる。2は口径13cm、器高11.5cm、3は口径7.2cm、器高8cmをはかり、2、3ともハケメ調整である。

以上、遺構と遺物について簡単に述べたが、時期的には弥生後期後半から終末期に比定しておきたい。

（岩永哲夫）



第20図 前原西塚B地区 2号住居跡実測図 (縮尺 1/30)



1 2号住居跡  
2・3 3号住居跡

第21図 前原西遺跡B地区住居跡出土実測図（縮尺1／3）

## ま と め

前原西遺跡B地区は狭い範囲の調査ではあったが、旧石器・縄文・弥生の三時期の遺構を確認することができた。

旧石器時代の遺物として良好な層位から細石核、細石刃、剥片が出土した。学園都市建設用地では初出のことであり、この地域が連綿として人間活動の継続を可能にし得た良好な生活環境を形成していたことを改めて知ることとなった。

縄文時代の遺構・遺物は、5号地、7号地遺跡で検出された集石遺構と、共伴する貝殻条痕文土器である。しかし、その在り方は検出された遺構の数量とともに、集石遺構の石蒸しの機能を確信し得る遺構が含まれていたという事で注目されて良いし、遺構の類別化、構成する蹠（群）などの検討を通じて機能の解明への有効な資料を得たことになる。

弥生時代に関しては、調査地の北側に3軒分の竪穴住居跡が検出されたが、保存状態は決して良いものではなかった。地形の変更された周辺の状況、掘削による土層の欠失などから辛うじて残っていた住居跡とも言え、集落の構造など詳細は他遺跡での住居跡の時期的変遷とも合わせ検討してみたい。何はともあれ、地理的な分布上でも関連する14号地、19号地、20号地の住居跡群に資料を加えたことは収穫であった。

（岩 永 哲 夫）

## 5. 前原南遺跡（19号地遺跡）

### 調査区の設定と概要

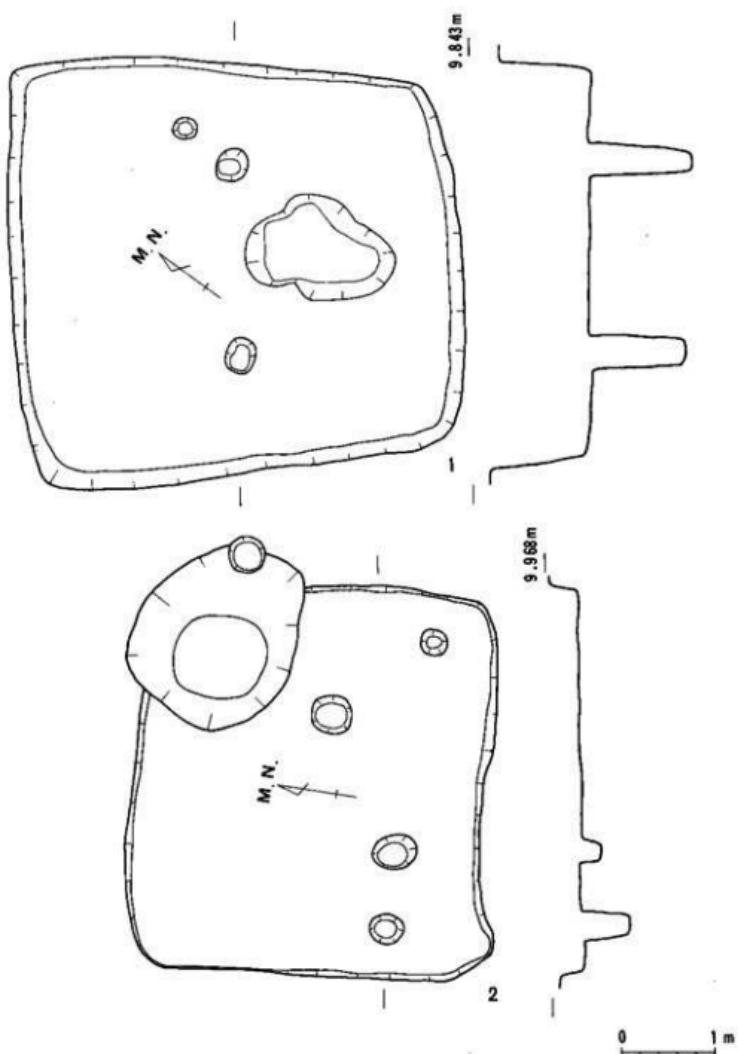
56年度試掘の結果、耕作土下の暗黒褐色土層、アカホヤ層が良好に残り、上段部（A区）に住居跡、下段部（B区）に柱穴群が確認されたので、調査区の全面（6,770 m<sup>2</sup>）を調査することにした。耕作土と淡黒褐色の砂質層を重機で排除し、暗黒褐色土を露出させたが、遺構の確認が難しいため、暗黒褐色土を拂しながら遺構の確認を行い、アカホヤ面まで下げた。その結果、竪穴式住居をA区で5軒、B区で4軒、計9軒、掘立柱建物をA区で13棟、B区で5棟、計18軒、土壙をA区で3、B区で1、計4をそれぞれ検出した。

### 包含層の状態

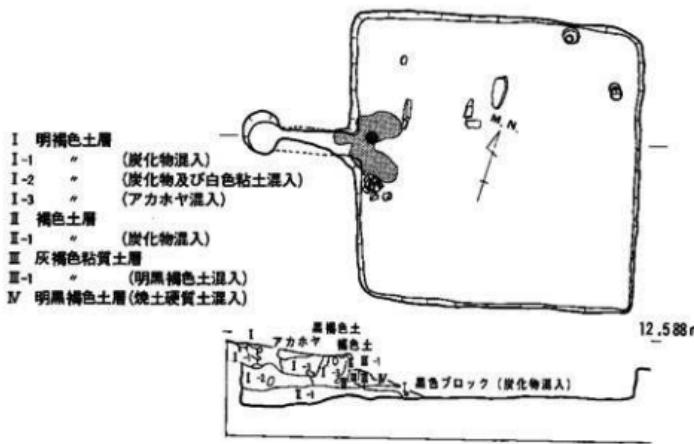
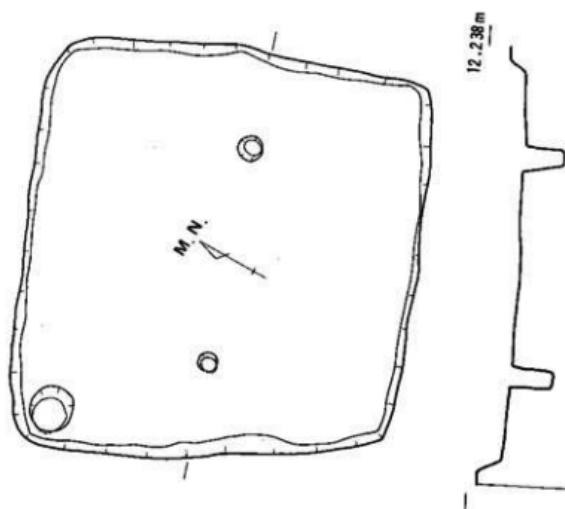
単純層は、耕作土の下に、旧耕作土。その下に淡黒褐色砂質層（第3層）、暗黒褐色土層（第4層）、アカホヤ層（第5層）、褐色土層（第6層）と続く。A区は調査区の北端と東南端、それと西半ではアカホヤ層、さらには褐色土層まで削平されており、中央部は少し底くなる谷状地形で東から南へ湾曲して暗黒褐色土層が残る。B区は東側の谷川底地へ下がる傾斜を示しており西半はアカホヤ層、さらに褐色土層まで削平されており、東端へ行くほど暗黒褐色土が厚く堆積する。遺物は、A区、B区とも暗黒褐色土の下層部に集中しており、土師器片、須恵器片がみられる。また、土垂や布痕土器も多量に出土している。

### 遺構（第22図～第23図）

A区の竪穴式住居跡は5軒を数えるが、それらの位置は、北側東端部に3号住居跡があり、その西10mに4号住居跡、15mに5号住居跡がある。4号住居跡の南35mに7号住居跡、さらに25m南に6号住居跡がある。B区では、東北端部に9号住居跡があり、その西10mに2号住居跡がある。2号住居跡の南15mに8号住居跡、10m南西に1号住居跡の計4軒を数える。そのうち、9号住居跡（第22図-2）は、東西幅約380cm、南北幅約420cm、検出面からの深さ約20cm、主軸をN-6°-Eにもつ住居跡で、北角を直径約200cm、深さ約100cmの土壙と、2間×3間の掘立柱建物の柱穴2本で切られている。住居跡の柱穴は、南角と東角に深さ約50cmの2本の柱穴が確認できた。遺物は床面より10～15cmのレベルで多量の土器が出土している、高环、器台、壺、甕形土器等がみられる。8号住居跡（第22図-1）は東西幅約460cm（北壁）約400cm（南壁）、南北幅約480cm、検出面からの最深部約50cmで、主軸をN-3°-Eにもつ。柱穴は中央部に約120cmの柱間をもつ2本柱（深さ約110cm）であ



第22図 前原南遺跡 8号・9号住居跡実測図（縮尺1/60）



第23図 前原南遺跡4号・6号住居跡実測図(縮尺1/60)

る。柱穴の南側の窪みに炭化物を含む焼土を検出する。遺物は小型の壺形土器などわずかである。4号住居跡（第23図-1）も同じタイプの住居跡である。東西幅約440cm（北壁）約400cm（南壁）、南北幅約420cm、柱穴は柱間約160cmの2本柱で、深さは約45cmである。柱穴の南側に100cm×200cm程の範囲で炭化物を含む焼土がみられる。また、北側にも小範囲の焼土がみられる。遺物はミニチュア土器の他、わずかに土師器片が出土する。主軸はN-35°-Eを示す。5号住居跡も、中央部に2本柱をもつ住居跡である。6号住居跡（第23図-2）は、東西幅約290cm、南北幅約310cm、検出面からの深さ約40cmで、柱穴は検出できなかった。主軸はN-72°-Eではば東西を向く。西壁中央に接して附設されるカマドをもち、檐部は馬蹄形をなす。煙道は住居外に伸び、約120cmのところにはば垂直に立ちあがる煙出しがある。火床部には壺形土器が伏せた状態で置かれていた。遺物は床面より底部穿孔の壺、蓋、鉢形土器などの土師器の他、石皿、輕石も出土している。他にカマドをもつ住居跡として、1号住居跡と7号住居跡がある。

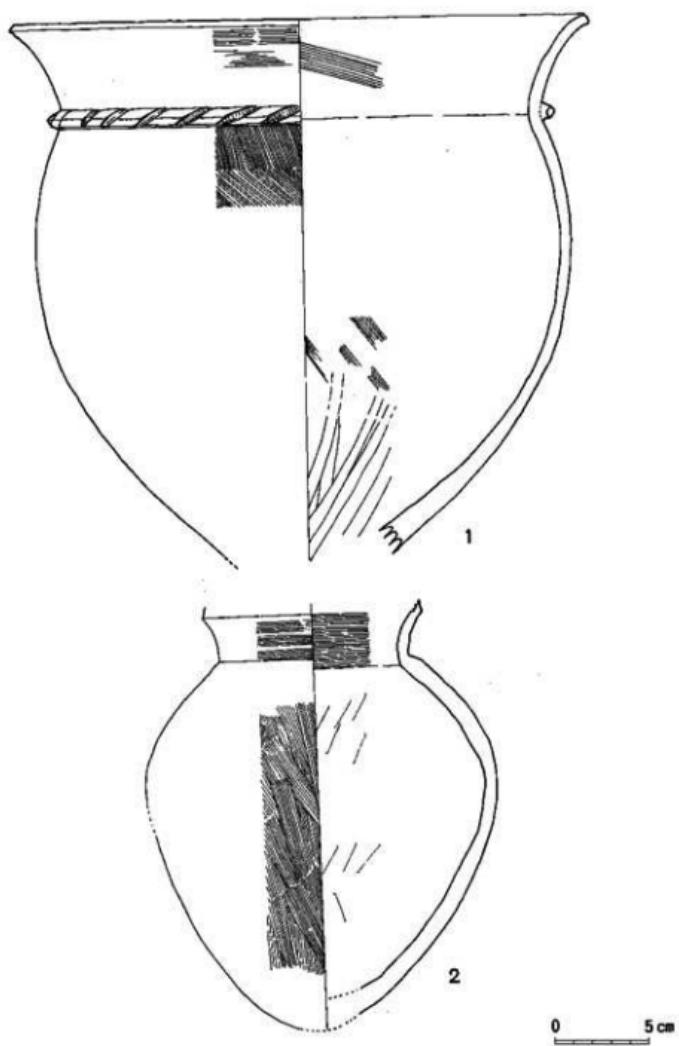
掘立柱建物は、A区では、西半に集中しており、特に、7号住居跡を切っている2間×5間の掘立柱建物は、柱穴の大きさが直径60~70cm、深さ80~90cm、柱間120~130cmの規模をもつ大型のものである。B区とあわせて、2間×2間が4棟、2間×3間が13棟、2間×5間が1棟確認されている。遺物としては、B区の柱穴からヘラ切底の皿が出土している。

### 遺 物（第24図～第26図）

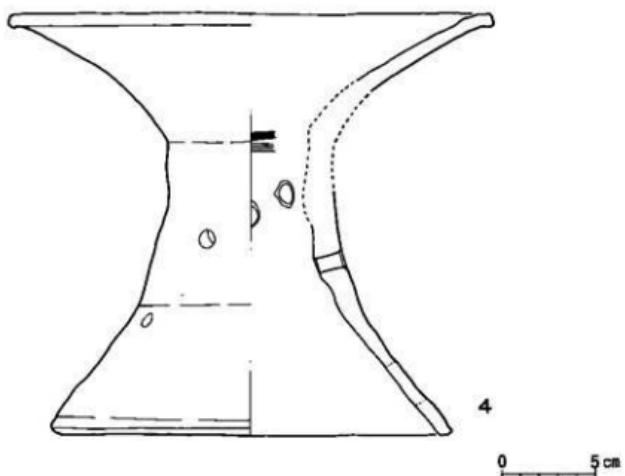
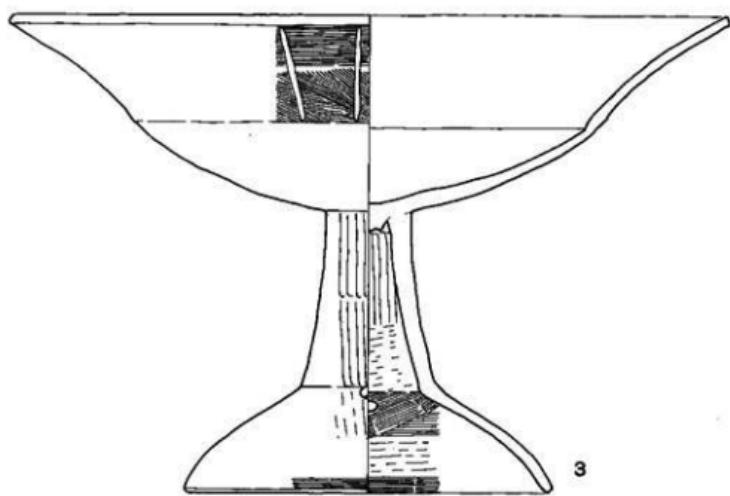
9号住居跡出土の土器（第24図1、2、第25図3、4）のうち、1は口縁部が短かく内傾する袋状の二重口縁壺で、胴部に丸味をもち、底部も丸底となる。2は頸部に布痕整形のみられる絡繆突帯をもつ壺で、口縁部がラッパ状にひろがり、胴部は丸味をもつ。3は、坏部中位で陵をもち、ラッパ状にひろがる坏部と、わずかにひろがる脚部に、内湾気味の檐部をもつ高环で、透孔は、脚部と据部の境に3個を数える。4は、上下に開く鼓形の器台で、口縁部のひろがりが大きい。透孔は10個を数える。また、3号住居跡でも、3、4、と類似の土器片がみられる。

4号住居跡出土の土器（第26図1、2）は、ともに小型の土器で、外面にみがき気味のへラ削りが施されている。8号住居跡出土の土器（第26図3）も小型の壺形土器である。

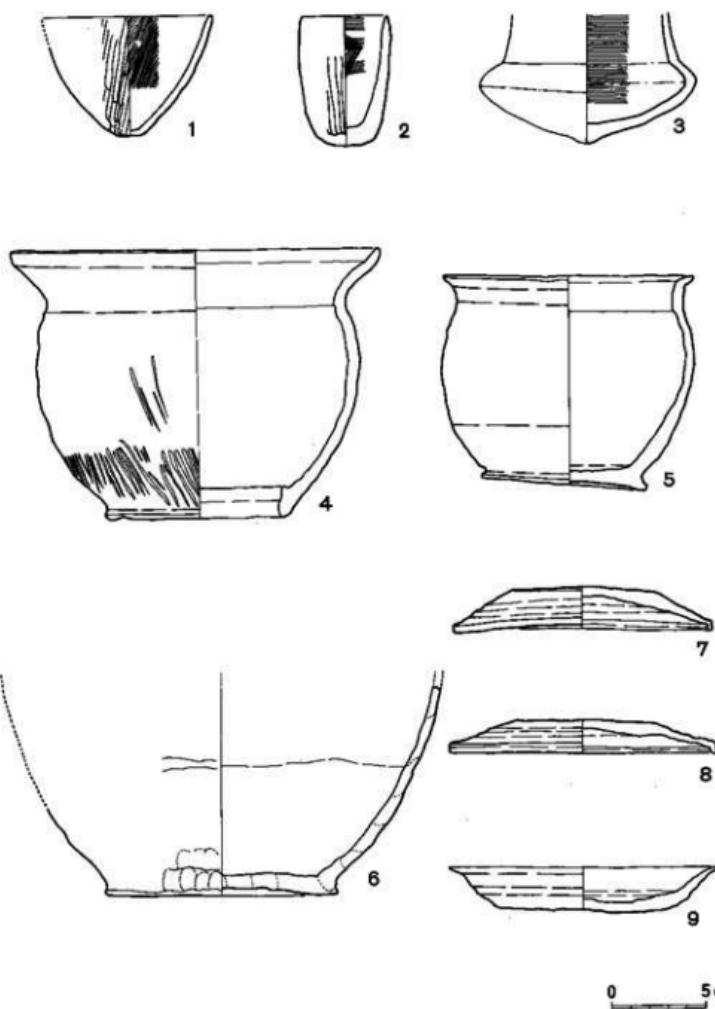
6号住居跡出土の土器（第26図4～8）のうち、4は、底部に穿孔をもち、口縁部は大きく「く」の字に外反したのち内湾する。外面は粗いハケ目調整が施される。穿孔部はやや太く端部は丸くおさめられ、壺の可能性もある。カマド火床部より出土した5は、直立しながら



第24図 前原南遺跡 9号住居跡出土土器実測図(1) (縮尺1/3)



第25図 前原南遺跡 9号住居跡出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



第26図 前原南遺跡出土土器実測図（縮尺1／3）

端部近くで強く外反する口縁部をもち、胴部はあまり張らずに底部に至る。底部はやや上げ底気味の木の葉底である。6は、鉢形土器で、カマド裾部南側より出土し、輪積み技法で成形され、底部には木の葉痕を有する。7と8は、重なりあった状態で検出され、共に天井部にヘラ切痕を残し、口縁部は丸味をおびる。

第26図9は、B区2号住居址の南に隣接する掘立柱建物（2間×3間）の北側隅の柱穴から出土した土師器皿である。口縁部は端部近くで強くひらき、底部は、ヘラ切り底である。

### ま と め

19号地遺跡で検出された堅穴式住居跡については、大きく3段階の時期に分けられる。1つは、土師器の高坏や器台を伴う住居跡（9号住居跡、3号住居跡）。次に、中央部に2本柱をもち、小型の土器を伴う住居跡（4号住居跡、5号住居跡、8号住居跡）。さらに、カマドをもつ住居跡（1号住居跡、6号住居跡、7号住居跡）である。9号住居跡でみられる二重口縁の壺や絡繩突帯をもつ壺、それに高坏については、北側に隣接する20号地遺跡2号<sup>(1)</sup>住居跡でも出土しており、同時期と考えられる。また、今年度調査の14号地遺跡でも内部に突出部をもつ住居跡から、この形態の高坏が出土しているが、それよりは新しく、土師器的様相をもつ高坏である。また、2本柱をもつ住居跡については、やはり、14号地遺跡でも、同形態の住居跡がみられるが、出土土器は弥生的様相をもっており、19号地遺跡のそれが、明らかに土師器と思われる土器を出土していることから、この両者の住居跡については時期差は明瞭である。

前の二時期とはある程度の期間をおいて、6号住居跡等のカマドをもつ住居跡が出現する。住居外に煙道をもつ例としては、昨年度調査した7号地遺跡出土の住居跡、今年度調査の10号地遺跡1号住居跡などがあり、これらと、19号地遺跡のカマドをもつ住居跡とほぼ<sup>(2)</sup>同時期と思われる。しかし、浄土江遺跡304号住居跡よりは新しい段階のものであろう。また、19号地遺跡では、掘立柱建物の一部がカマドを持つ住居跡を切っており、その出現期および、堅穴式住居跡との関係なども考えなければならない。さらに、掘立柱建物について言うと、2間×3間のものが全体の3分の2を占め、主軸もほとんどが南北を示していることは、ある一定の企画性をもつと思われる。

このように、19号地遺跡では、同様な造構、遺物を検出する7号地遺跡、10号地遺跡、さらには、14号地遺跡や、隣接する20号地遺跡など広範囲にわたって関連ある遺跡との検討を本報告までの課題としておきたい。

- 註(1) 7号地遺跡や10号地遺跡でも土鍤と布痕土器が伴っている。
- (2) 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（II）」1981 宮崎県教育委員会
- (3) 「浄土江遺跡 宮崎市文化財調査報告書第6集」1981 宮崎市教育委員会  
(永友良典、谷口武範)

## IV、結語 — 住居の変遷にふれて —

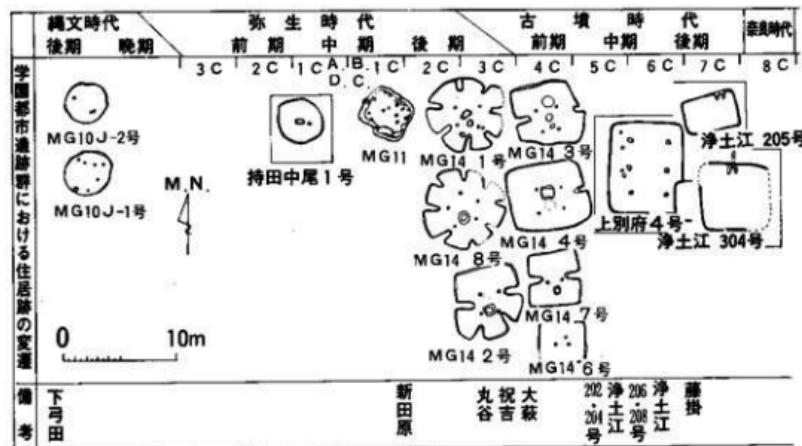
学園都市建設予定地内における発掘調査は、これまで断片的な成果にとどまっていた県内の各時代の住居及び集落の構造等について、一定のまとめた基準を与えるものとなりつつある。そこでここでは、学園都市にみられる住居と集落の変遷を概括し、あわせて県内の関連資料に触れ、今後の印象台を提示しようと思う。

縄文時代の堅穴住居跡としては、これまで串間市下弓田遺跡、小林市中山ノ前遺跡、本田遺跡などの例が知られているが、実測図等住居跡のプランを示す資料に欠けることが多く、実態の把握が困難であった。今回、平畠遺跡において確認された堅穴住居跡は、縄文後期から晩期にかけてのもので、すべて円形プランを呈している。後期の資料としては、下弓田遺跡<sup>(1)</sup>の住居跡があるが、これは方形プランであったとされる。

平畠遺跡の全容についてはいまだ明らかにし難いが、一応の集落構造を把握し得る県内唯一の資料であることは間違いない。本報告において、その詳細に触れることになろう。

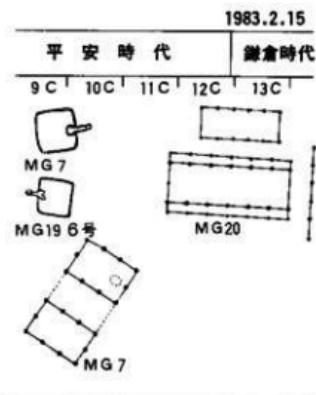
弥生時代の住居跡になると調査例の蓄積があるが、後期～終末期にかけてを除いては、集落として扱い得る資料は少ない。

前期の住居跡としては、石川恒太郎氏が敷石住居跡とされる櫛遺跡の例がある。しかし、その後、当該期についての資料がなく、県内における前期住居跡の諸相は明らかでない。中



期では、これまで明瞭なものにとぼしかったが、前期末～中期前半にかけての持田中尾遺跡、中期後半の新田原遺跡、そして学園都市堂地東遺跡など住居跡の構造が把握されるようになった。持田中尾遺跡においては二基確認されており、いずれもやや歪な円形プランを呈している。<sup>(3)</sup>この住居跡の特徴は、中央に数個の石を内蔵する掘り込みをもつことであるが、焼土等が直接伴うことはない。後に触れる終末期の住居跡における掘り込みにも直接焼土を伴うことなく、性格付けに課題を残している。堂地東遺跡における住居跡は不整形ながら方形プランを呈し、円形プランのみ存在するのではないことを示している。

さて、中期後半の新田原遺跡を現在確認し得る上限として、日向ないしは南九州における竪穴住居跡の形態に大きな変化と特徴が生じている。<sup>(4)</sup>新田原遺跡の竪穴住居跡は、円形プランを基本とし、内部に突出する壁をもつものである。<sup>(5)</sup>このいわば日向型間仕切り住戸ともいるべき住居跡は、後期から終末にかけて盛興するものと思われる。その類例等については、熊野原遺跡の報告の中で菅付が触れているので重複をさけるが、資料の集成の結果、この種の住居跡は、大きくは4つのタイプに分類されるようである。I類は、基本プランを円形とするもので、新田原を上限とし学園都市熊野原の1号・8号を下限とするものである。II類は、基本プランを方形とし、その一部には古墳時代に下るものがある。熊野原では3号・4号がこの類で、2号はI類との折衷様である。III類は、II類が小規模化したものであるが、二本柱が基本で、7号がその代表である。IV類は、熊野原にはその例がないが、大槻4



第27図 住居跡変遷一覧図  
(縮尺1/500)

\*枠組みは県内関連遺跡。実測図は各報告書による。

号住居跡を代表とする、Ⅲ類と同じく小プランに二本柱であるが、突出壁が一箇所で二本の柱に対し直交する形で存在するものである。この類は、鹿児島県王子遺跡においても存在するようである。<sup>(6)</sup> 及びこれらの変形が存在するのはいうまでもない。また、詳細な分類は、本報告にゆづりたい。

熊野原においても突出壁のない二本柱の住居跡がみられたが、前原南遺跡においては、この種の住居跡が一つのまとまりとして存在した。

古墳時代の初源期に存在するのが、この種の堅穴住居跡である。須恵器を伴う最も古い堅穴住居では、宮崎市浄土江202号、204号が知られ、共伴は小型丸底壺などである。この時期の住居跡も方形プランで、その後は方形が基本となる。構造的に注目されてくるのは、六世紀代に入り、浄土江206号、208号あるいは新富町藤掛遺跡の例のように住居跡中央に埋甕をもち、焼土面が形成されるものがある。しかし、この種の構造は七世紀に入るとカマドの出現により消滅する。カマドをもつ住居跡の上限は、現在のところ、浄土江205号・304号である。304号では煙出しが掘り抜かれ、この構造はやがて、学園都市前原南遺跡などにみるタイプに発展する。昨年の赤坂（7号地）遺跡を初見とした、カマドと長い煙道をもつ住居跡は、9～10世紀において完成されたものであろう。

この時期になると、掘立柱建物も普及し、学園都市遺跡でも必ずといってよい程この種の建物跡が検出されている。図にかけた、赤坂遺跡の掘立柱建物は二棟が組みとなり機能するものであり、また12～13世紀にかけての館跡と思われる前原北（20号地）遺跡も横列も含み数棟が単位となる。各遺跡とも調査年次的に断片にとどまっているため屋敷構造等を提示することはまだ出来ないが、最終的にはその検討も可能となろう。

以上、学園都市内における住居の変遷を中心に、簡単に住居の変化についてふれてみたが、やはり今後の課題は、集落それ自体の在り方についてであろう。学園都市における集落の在り方は、検出された遺構からみると疎な状態であり、その意味でかえって集落の構成・構造をより純粋に摘出し得るともいえる。

（北郷泰道）

註 (1) 宮崎県教育委員会『下弓田遺跡』 (2) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』 (1968年)

(3) 高鍋町教育委員会『持田中尾遺跡』 (1982年)

(4) 未報告であるが、調査者中山悦雄氏（県総合博物館）の御教示による。

(5) この名称は、長津と北郷が話し合いの上、長津が決定した。

(6) 過日の遺跡見学の際確認させていただいた。 (7) 宮崎市教育委員会『浄土江遺跡』

(8) 未報告であるが、調査者岩永の教示による。

# 付 編

# 宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨

※ 松下孝幸  
※ 分部哲秋  
※ 石田 肇  
※ 石田正史

## はじめに

宮崎市熊野では宮崎学園都市の建設にむけて、遺跡の発掘調査が進められているが、その中の堂地東遺跡にある近世墓から1982年に7体の人骨が出土した。人骨が出土した場所には墓石が残っており、別項で述べられているように考古学的所見より、この墓地は近世の後期（18世紀～19世紀）に営なされたものであるという。従って出土した人骨はすべて近世人骨である。

人骨の保存状態は悪いものであったが、九州での近世人骨の出土例は少なく、また宮崎県では組織的な発掘調査による近世人骨の出土例はこれが初めてであり、資料としては貴重である。できる限り詳細に観察や計測を行なったのでその結果を報告したい。

## 資料

宮崎学園都市堂地東遺跡にある13基の近世墓のうちの7基より7体の人骨が出土した。13基のうちの1基の遺構中より木片が検出されていることから、遺体は早桶などの棺に納められて埋葬されたものと考えられる。墓壙は深く掘られており、底面が現地表から約2mに達するものもあったが、筆者らが近年調査した山口市の荒谷墓地や島根県の鷺峰寺墓地などの近世墓地も同じ様に深く墓壙が掘られていた。

保存状態が悪かったので、葬位を明らかにすることはできなかった。7体の出土人骨の性別、年令は下記の所見より、表1のとおりである。7体の人骨のうち成人骨は6体で、そ

表1. 人骨一覧

人骨番号	性別	年令
4号人骨	女性	壮年
5号人骨	不明	熟年～老年
8号人骨	男性	不明
10号人骨	不明	不明
11号人骨	男性	壮年
12号人骨	男性	壮年
13号人骨	不明	小児(I)

※分部の区分法による(1981)

※ 長崎大学医学部解剖学第二教室

※※ 長崎大学医学部大学院

のうち男性は3体、女性1体で、性別不明が2体あった。また残りの1体は恐らく小児期の人骨と推定される(表2)。

計測方法は、Martin-Saller(1957)の方法によった。

表2. 資料数

所見	成人			小兒	合計
	男性	女性	不明		
	3	1	2	1	7

#### 4号人骨(女性・壮年)

遊離歯が18本と14mm角の骨種不明の骨片が1個残存していただけである。残存歯を歯式で表わすと次のとおりである。

M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>	C	I <sub>3</sub>	/	I <sub>2</sub>	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M <sub>2</sub>	/		
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>2</sub>			/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

〔/: 不明  
※: 歯冠のみ〕

歯の径は小さく、咬耗は弱く、Brocaの1度である。

性別は、歯の径が小さいことから女性と考えられ、年令は歯の咬耗が弱いことから壮年と考えられる。

#### 5号人骨(性別不明・熟年～老年)

頭蓋のみが残存していた。右頭頂骨の乳突角部、後頭骨の右側のラムダ縫合と乳突縫合の一部および右側頭骨乳突部の後頭縫合の部分が残存していた。すなわち、右側のアステリオントを中心として、頭頂骨、後頭骨、側頭骨のそれぞれ一部分が残存していた。従って、頭頂乳突縫合、後頭乳突縫合およびラムダ縫合

表3. 上腕骨計測値  
(8号人骨、男性)

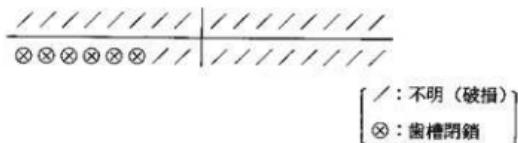
	(mm)	
	右	
7. 骨体最小周	65	

表4. 大腿骨計測値  
(8号人骨、男性)

	(mm)	
6	骨体中央矢状径	33
7	骨体中央横径	34
8	骨体中央周	106
6/7	骨体中央断面示数	97.06

のそれぞれ一部が観察できる。この3縫合とも外板においては開離しているが、内板はともに癒合閉鎖している。また後頭骨は十字隆起の部分も残存しており、この部分の骨壁は厚い。右側頭骨も上記の部分以外に、鱗部を欠く錐体部分が残っていたが、乳様突起の尖端は欠失している。

下顎骨は右半分が残存しているが、下顎枝は下顎角、関節突起および筋突起を欠いている。歯槽部には骨の委縮が認められ、下顎体の高径は低い。歯槽はすべて閉鎖しており、歯は1本も釘植していなかった。この歯槽の状態を壇式で示すと次のとおりである。



下顎枝は後方へ大きく傾斜しており、下顎枝角は大きいようである。

性別は、これだけの残存資料からは明らかにすることはできなかったが、年令は、観察できた縫合が内板では完全に癒合していることや下顎骨の歯槽部の吸收状態および下顎枝角が大きいことから、熟年ないし老年と推測される。

#### 8号人骨（男性・年令不明）

四肢骨のみが残存していた。現場では大腿骨および脛骨の骨体をそれぞれ左右とも確認することができたが、骨質の保存状態は著しく悪く、取り上げに耐えられたのは、右側の上腕骨、右側の大腿骨および右側の腓骨のそれぞれ骨体の一部だけであった。

##### (1) 上腕骨

右側骨体の遠位端が残存していた。計測は骨体最小周のみが可能であり、その値は65mmで上腕骨の径は大きい（表3）。

##### (2) 大腿骨

右側の骨体の保存状態は良好で、計測も可能であった。計測値は表4に示すとおり、推定中央位での矢状径は33mm、横径は34mm、中央周は106mmで、骨体の径は著しく大きいが、骨体断面示数は97.06となり、矢状径よりも横径の方が大きい。しかし粗線の発達はきわめて良好である。すなわち、本例の大腿骨は太くて径は大きく、粗線の発達も良いものがあるが、繩文人の大腿骨にみられるような骨体そのものが後方へ突出し、いわゆる柱状形成をなすものではなく、骨体の断面はむしろ横広ろの楕円形を呈している。

### (3) 肋骨

右側骨体の一部が残存していた。径は中程度であり、溝状形成も稜の発達も中程度のものである。

### (4) 性別・年令

性別は残存している四肢骨の径が著しく大きいことから、男性と考えられるが、年令は不明である。

#### 10号人骨（性別・年令不明）

遺存状態は著しく悪く、側頭骨の錐体のごく一部分と遊離歯1本が残存していただけである。歯は上顎の右側第3大臼歯（M<sub>3</sub>）の歯冠のみで、咬合面は皺状を呈しており、また咬耗は全く認められないで、未萌出だったかあるいは萌出直後のものと思われる。

性別、年令はともに不明である。

表5. 骨体最小周(男性、右)

	n	M	max	-min	(mm)
8号人骨		65			
四郎丸近世人 （松下、他）	1	66			
川田京坪近世人 （松下、他）	3	63.00	65	— 59	
松之尾中・近世人 （松下）	17	60.24	70	— 54	
桑島近世人 （立志）	15	66.22			

表6. 大腿骨計測値(男性、右) ■

	8号人骨				川田京坪				松之尾				桑島			
	四郎丸 近世人 （松下、他）				近世人 （松下）				中・近世人 （松下）				近世人 （立志）			
	M	n	M	n	M	n	max.	min.	n	M	max.	min.	n	M		
6.	骨体中央矢状径	33	1	28	3	28.67	30	-28	11	26.55	30	24	14	26.29		
7.	骨体中央横径	34	1	27	3	28.33	30	-27	11	25.64	31	-22	14	24.66		
8.	骨体中央周	106	1	87	3	89.67	93	-88	11	82.84	94	-73	14	80.51		
6/7	骨体中央断面示数	97.06	1	103.70	3	102.59	111.11	-96.67	11	104.03	116.00	-88.89	14	107.09		

ムダ縫合の一部を観察することができたが、内外両板とも開離していた。

下頸骨は右側の歯槽部のごく一部が残存しており、ここには歯も釘植していた。

歯はこの他にも遊離歯（歯冠のみ）となって残存しており、これらを歯式で表わすと次のとおりである。

C I <sub>2</sub> /	M <sub>1</sub> //
/ M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> / M <sub>1</sub> //

〔/：不明  
-：遊離歯〕

歯の径はやや大きく、咬耗度は Broca の 2 度である。

## (2) 四肢骨

上肢骨のみが残存していた。

### 1. 肩甲骨

右側の肩甲棘と関節窓の一部が残存していた。肩甲棘はやや大きい。

### 2. 上腕骨

右側の骨体中央部と上腕骨頭の一部とが残存しており、上腕骨骨体の径は大きい。

## (3) 性別・年令

性別は乳様突起が大きく、上腕骨の径も大きいことから、男性と考えられ、年令は観察できた縫合が開離していることや歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

## 12号人骨（男性・壮年）

頭蓋、骨種不明の長骨片および軀幹骨の一部が残存していた。

### (1) 頭蓋

後頭骨の後頭鱗が外後頭隆起の部分から頂平面にかけて残存しており、外後頭隆起の発達はきわめて良好である。その他に右側頭骨の錐体が残存していた。

歯は遊離歯 2 本が残っており、これは上顎左側の第 1 および第 2 大臼歯 ( $|M_1|, |M_2|$ ) であり、 $M_1$  は歯冠のみで、また咬耗度は Broca の 1 度である。

### (2) 軀幹骨

第 1 頸椎と第 2 頸椎とが残存していた。第 1 頸椎は右側の外側塊から後弓にかけての部分が残存しており、第 2 頸椎は歯突起と右側上関節面が残存していた。

### (3) 性別・年令

性別は、外後頭隆起の発達がきわめて良好なことから男性と考えられ、年令は歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

### 13号人骨（性別不明・小児）

歯冠のみの遊離歯が7本残存していただけである。残存歯を齒式で示すと次のとおりである。

/ M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>3</sub> P <sub>2</sub> C / /		/ / / P <sub>1</sub> / / / /
/ / M <sub>1</sub> / / / / /		/ / / / / / / / / /

〔/：不明〕

M<sub>1</sub>にはわずかに咬耗の跡が認められるが、それ以外の歯については咬耗は観察されないので、年令は著しく若いと考えられ、恐らく小児（I）期のものと推定される。なお性別は不明である。

## 考 察

近世人骨は関東地方では工事に伴って、旧墓地から大量に出土しており、研究も進んでいるが、九州では出土例が少なく、良質の近世人骨の出土が期待されている。

本例は保存状態が悪かったので、頭型や顔面の形態など頭蓋の特徴を知ることはできなかったが、残存資料を観察した限りでは、男性頭蓋の径はけっして小さくないようであり、また外後頭隆起の発達も良好なものである。

四肢骨については、男性の上腕骨および大脛骨が観察可能なものであった。上腕骨は8号人骨の骨体最小周のみが計測でき、その計測値は65mmと大きいものであった。これを同じ九州の例である熊本県興善寺四郎丸近世人（松下、他、1980）、同県川田京坪近世人（松下、他、1980）、同県桑島近世人（立志、1970）、および鹿児島県枕崎市松之尾中・近世人（松下、1981）と比較してみると（表5）、川田京坪近世人および松之尾中・近世人の平均値よりも大きく、四郎丸および桑島近世人と大差ない。

大脛骨（8号人骨）についても同様の比較を行なってみると（表6）、骨体中央矢状径、骨体中央横径および骨体中央周の3径ともどの比較資料よりも大きく、骨体中央断面示数は逆に全比較群よりも小さい。また骨体中央周が100mmを超えることは縄文・弥生時代でもほとんどまれで、下肢骨が特に太くて頑丈である佐賀県の二塚山弥生人でも、100mmを超える

ものは26例中4例（右側、15.38%）しかなく、このことを考慮すればこの8号人骨の大腿骨は著しく太いことがうかがえる。粗線の発達も良好なものであるが、いわゆる柱状形成の像は認められず、径は大きいものの形態的には縄文人とは異なるものである。

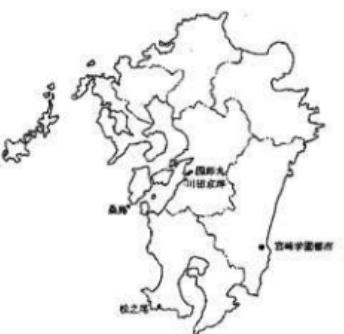
一般に、縄文・弥生時代人の四肢骨は比較的頑丈で、筋付着部の発達も良いが、歴史時代になるとやきしゃになると考えられている。

しかし九州の資料だけを見ても、松之尾中・近世人は、異変がやや大きいものの、平均値的にはややきしゃであるが、四郎丸近世人および川田京坪近世人の四肢骨は太くて頑丈であるというように、遺跡によって相当な違いがあるようである。

古墳時代以降の人骨の場合は、寺門（1981）も指摘しているように、所属している社会的階級によってその形質に相当な差異が認められることが予想されるので、この点を十分考慮に入れて検討することが必要であろう。

宮崎県では古墳時代人骨の保存状態は比較的良好で、県教育委員会文化課や地元の考古学研究者の方々の古人骨研究に対する深い理解と協力のもとで、長崎大学医学部での研究が進展しており、次第に地下式古墳人の特徴が明らかになってきているが、この古墳人の形質の由来とその後現代に至るまでの形質変化を解明するためには、古墳時代前後の資料が必要である。こういった観点からも本例は貴重な資料ではあるが、その特徴を全身にわたって明らかにすることはできなかった。今後も本県で全時代の資料を揃えるための努力を続けていきたい。

図1. 近世人骨出土主要遺跡



## 総 括

宮崎市熊野にある宮崎学園都市堂地東遺跡の近世墓から7体の人骨が出土した。保存状態は良くなったが、できる限り詳細に観察、計測を行った。その結果は次のように要約することができる。

1. 7体の出土人骨のうち成人骨は6体で、残りの1体は小児（I）期のものであった。成人骨のうち男性は3体、女性は1体で、との2体は性別を明らかにことができなかった。
2. 頭型や顔面の形態など頭蓋の特徴を知ることはできなかったが、男性頭蓋の径はや

や大きいものであった。

3. 四肢骨については、男性の上腕骨と大腿骨とが計測できたが、径は両者とも大きく、特に大腿骨は太くて頑丈であり、また粗線の発達も良好であった。しかし骨体そのものは矢状径よりも横径の方が大きく、いわゆる柱状形成は認められないものであった。
4. 宮崎県での近世人骨の組織的調査は本例が初めてであり、九州でも近世人骨の出土例は少なく、全身た地下式古墳人との関係を検討する上でも貴重な資料ではあるが、保存状態が悪く、全身にわたってその特徴を明らかにすることはできなかった。  
( 摘筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会、宮崎県埋文センターの諸先生方ならびに人骨研究についてご指導いただいた内藤芳篤教授へ感謝致します。 )

#### 参考文献

1. 欠田早苗, 1959: 犬内頭蓋骨の人類学的研究 - 現代猿人骨と江戸時代後期墳墓骨について。人類学報, 25: 53-63。
2. 河越逸行, 1957: 湯島無縫板出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学集, 16: 1-18, 1-5。
3. 松下孝幸・分部哲秋・1980: 熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺Ⅱ(熊本県文化財調査報告, 45) : 59-68。
4. 松下孝幸・分部哲秋・田代和則, 1980: 熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。熊本県文化財調査報告, 46(付論1) : 1-17。
5. 松下孝幸, 1981: 鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡(枕崎市松之尾地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)) : 215-228。
6. 森本岩太郎・小片丘彦、他, 1976: 東京都一橋高校遺跡出土の江戸時代人骨。人類誌, 84: 62。
7. 森本岩太郎・小片丘彦、他, 1976: 江戸時代における日本人形質の漸進的変化 - 東京都一橋高校遺跡出土頭蓋を中心として。人類誌, 84: 317-318。
8. 森本岩太郎, 1981: 歴史時代人骨。季刊人類学, 12(1): 7-18。
9. 森田茂・河越逸行, 1960: 湯島無縫板出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺。人類誌, 67: 278-295。
10. 内藤芳篤, 1974: 仁兵衛島出土の人骨。対島(淡茅湾とその周辺の考古学的調査)

(長崎県文化財調査報告書, 17): 106 ~ 112。

11. 鈴木 尚・佐倉 朔・他, 1962: 東京都芝白金、旧海軍墓地に埋葬された江戸末、明治初年の日本人頭骨。人類誌, 70: 105 ~ 120。
12. 立志悟朗, 1970: 熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人上肢骨の人類学的研究。熊本医会誌, 44: 1137 ~ 1150。
13. 立志悟朗, 1970: 熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第1、大腿骨について。熊本医会誌, 44: 1092 ~ 1115。
14. 寺門之隆, 1981: 中世・近世時代人骨。人類学講座、5 日本人 I, 雄山閣、東京、123 ~ 135。

表7. 堂地東遺跡近世墓一覧表

番号	規模 長軸×短軸×深さ (ca)	長軸の方向	人骨の有無	副葬品	備考
1号墓	150 × 90 × 30	NW 17°50'	無		釘出土
2号墓	170 × 120 × 80	NW 9°00'	無		
3号墓	200 × 180 × 130	NW 1°00'	無		
4号墓	180 × 140 × 95	NE 1°40'	有	銅 鐵	数珠玉(数個)
5号墓	160 × 95 × 115	NW 9°40'	有		
6号墓	90 × 60 × 90	NW 0°50'	無		
7号墓	85 × 55 × 95	NE 3°20'	無		
8号墓	170 × 130 × 115	NW 9°00'	有	銅 鐵 (寛永通宝)	
9号墓	100 × 160 × 105	NW 20°30'	無		
10号墓	100 × 70 × 90	NW 11°00'	有	銅 鐵	
11号墓	125 × 70 × 160	NE 3°00'	有	銅 鐵	木片・釘出土
12号墓	125 × 65 × 200	NE 6°00'	有	銅 鐵	
13号墓	105 × 60 × 125	NW 5°50'	有	銅 鐵	
14号墓	100 × 100 × 55 (推定)	NW 0°50'	無		4号・5号と 切り合ひ関係

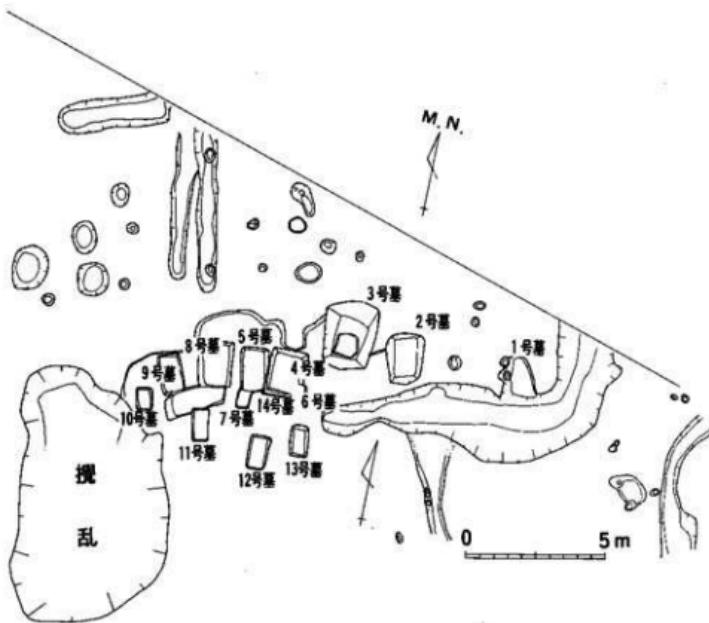


図2 堂地東遺跡近世墓分布図（縮尺1／200）

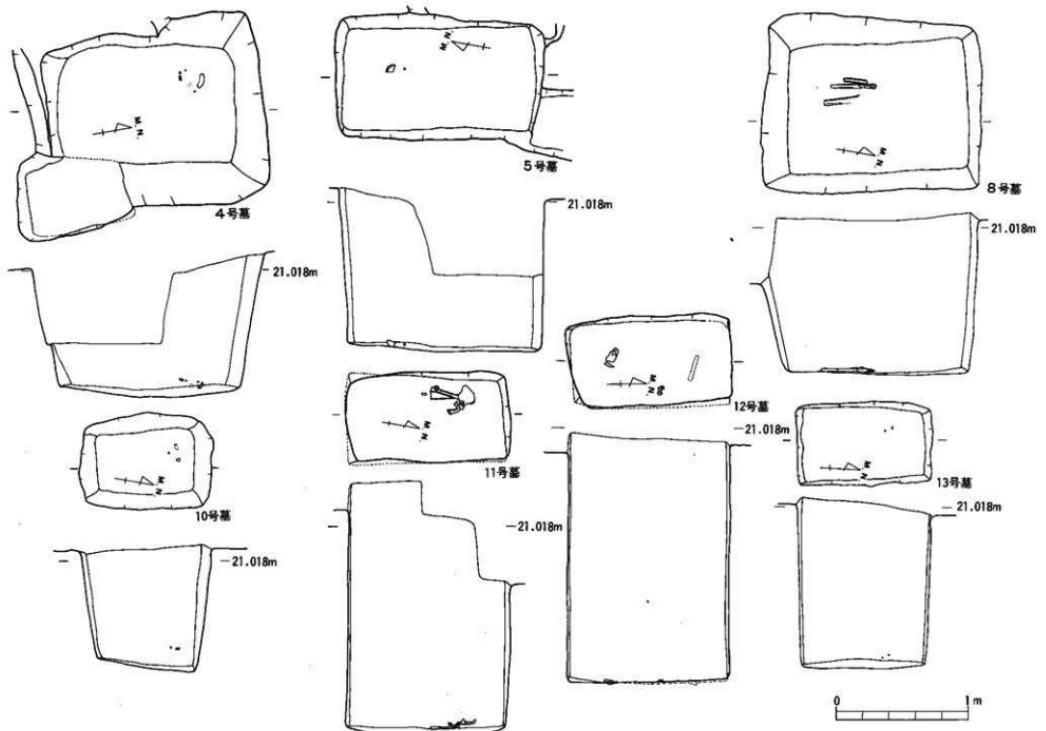
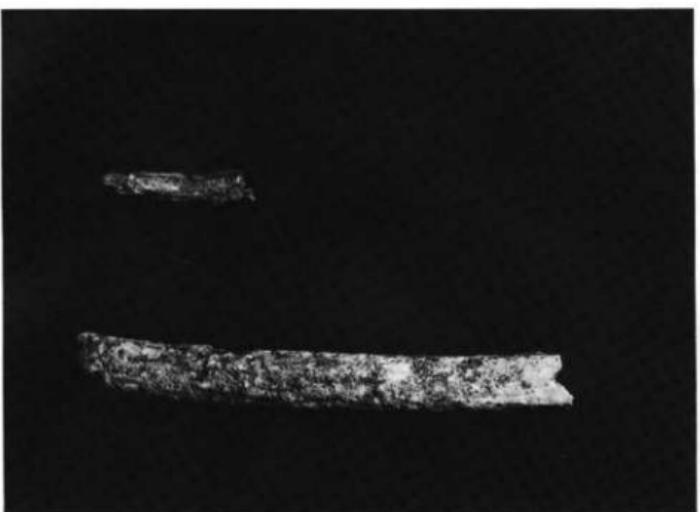
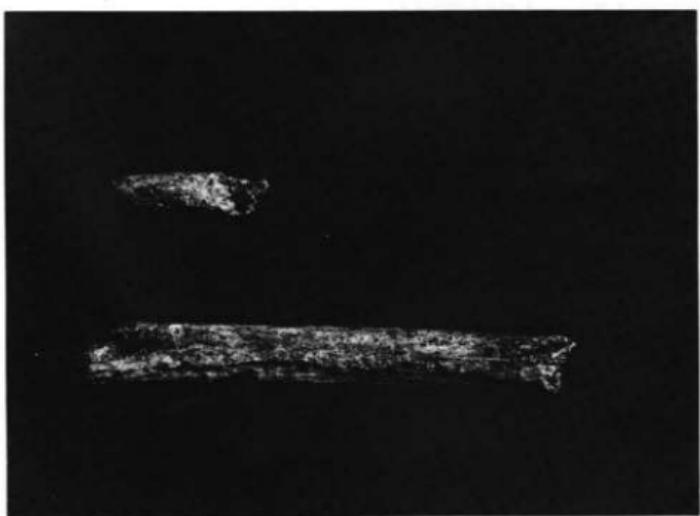


図3 塘地東遺跡近世墓人骨出土状況（縮尺1/30）

右上腕骨、右大腿骨（8号人骨·男性）前面

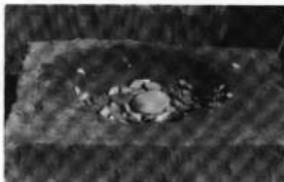


右上腕骨、右大腿骨（8号人骨·男性）後面



## 前原西遺跡集石遺構の取り上げについて

今年度調査した前原西遺跡では、12基の集石遺構を検出したが、その中でも、構造的な面からも、また、保存状態の面からも最も良好であった10号集石遺構について、遺構の切り取りを行い、展示保存を行うことにした。そこで、科学的な処理を、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室から御指導をうけ、遺構の取り上げ作業を行った。なお作業が途中ではあるが、以後の処理については、現在作業中である。



①遺構を精査し、サンコールSK50（50%水溶液）を注入し、土や石を固定する。



②取り上げる範囲のまわりを掘り込む。



③遺構表面に竹ぐしをさし込み、裏面を削る時のメドにする。



④ウレタンを剥ぐ作業をやり易くするため表面に画仙紙を水張する。



⑥天地を逆転したり移動する時、頑丈になるため造構の周囲にわく組などを入れて固定する。



⑦側面→表面の順で発泡ウレタン樹脂を流し込む。



⑧発泡ウレタン樹脂が固ったら天地を逆にするため、造構の下を切り離し、丸太を入れてウレタン樹脂を注入する。



⑨発泡ウレタン樹脂が固ったら造構の天地を逆にする。



⑩裏返しにした後、裏側の土を除去し発泡ウレタンを注入する。



⑪固ったら天地をもどして移動する。

以下の処理は現在作業中である。

(永 友 良 典)

## 23号地石塔群の保存処理および復元について

今年の1月から5月にかけて調査した23号地石塔群は、15世紀から18世紀にかけての石塔群で、五輪塔約400基、板碑約50基を数える。これはほど群集した石塔群の発掘調査例は少なく、中近世の墓地を知るうえで貴重な資料である。そこで、清武町の協力を得て、風化防止処理や復元可能な五輪塔、板碑の接合を行ない、同町黒板に移転保存した。なお、科学的な処理については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室の御指導をうけた。



①五輪塔や板碑の風化防止のためにエチルシリケートSS101をハケで表面に塗りこむ。



②接着可能な五輪塔等について、ドリルで接着面を穿孔し、ステンレス棒をくさびにし、エポキシ系接着剤（アラルダイトAW100と、アラルダイトHJV953Uを5:4の割で混ぜ合わせる）を接着する。



③大型の板碑については、一区画にまとめて立てた。



④一部の群については、出土状態そのまま復元した。

(永 友 良 典)

# 図 版

図版 1 平畠遺跡(1)



第5図1



第7図



第5図2・3



第6図

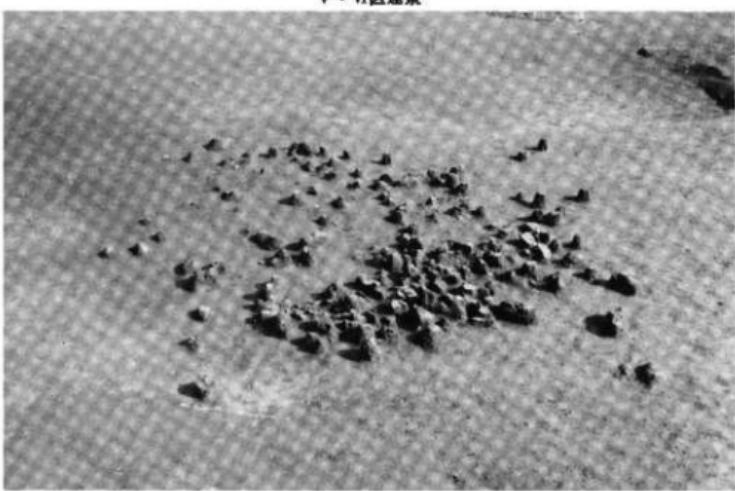


V区住居跡検出状況（第5図）下方が煙出し部

図版 2 平畠遺跡(2)

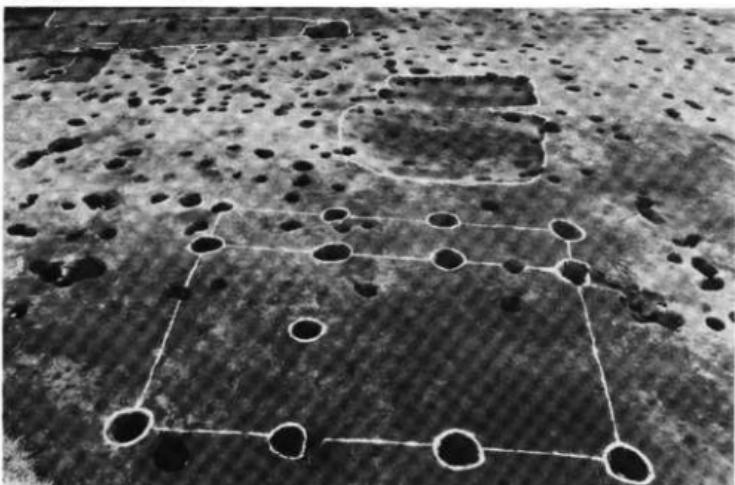


V・VI区遠景

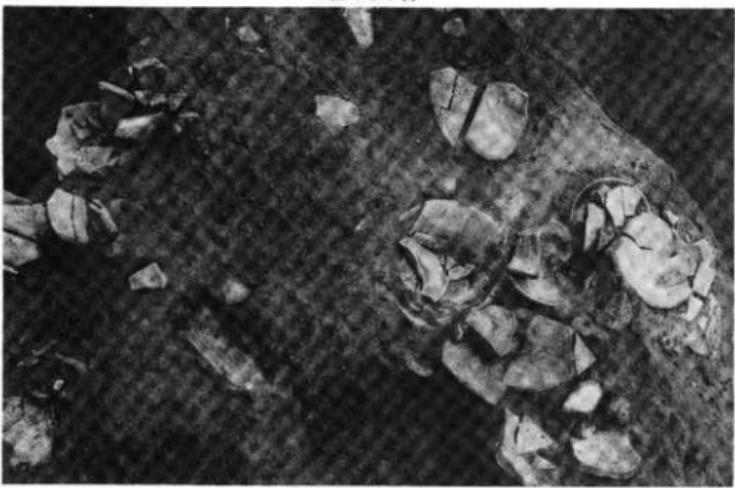


2号住居跡検出状況

図版3 堂地東遺跡(1)



I区ピット群



II区土師器出土状況

図版4 堂地東遺跡(2)

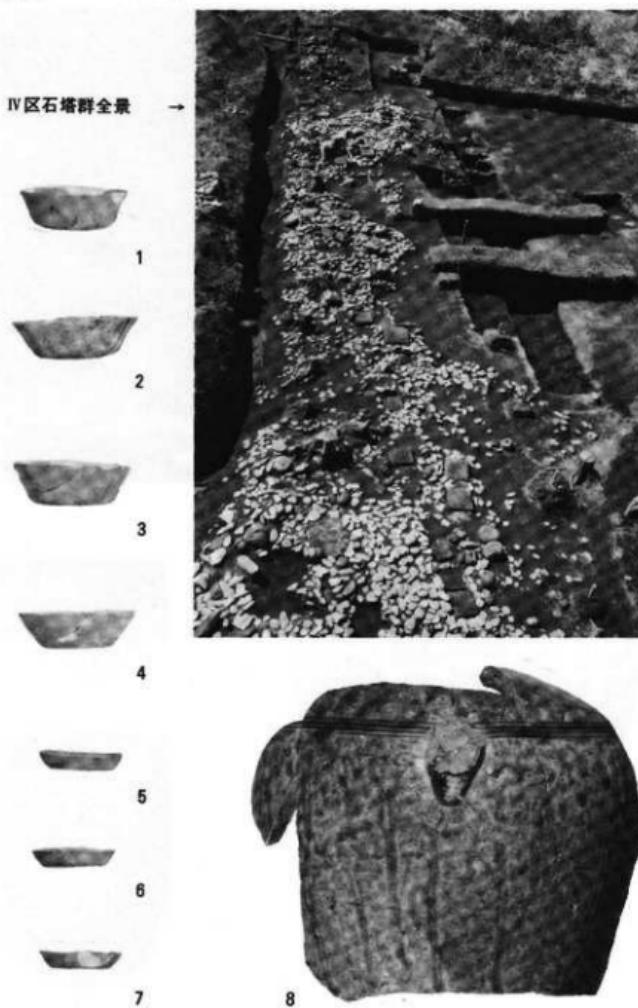


II区近世墓

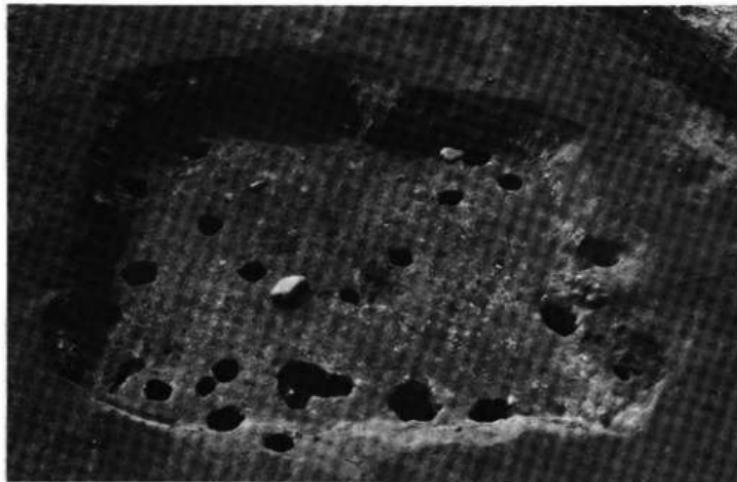


11号墓人骨出土状況

図版 5 堂地東遺跡(3)



図版 6 堂地東遺跡(4)



VI区 2号竪穴住居跡



9



10

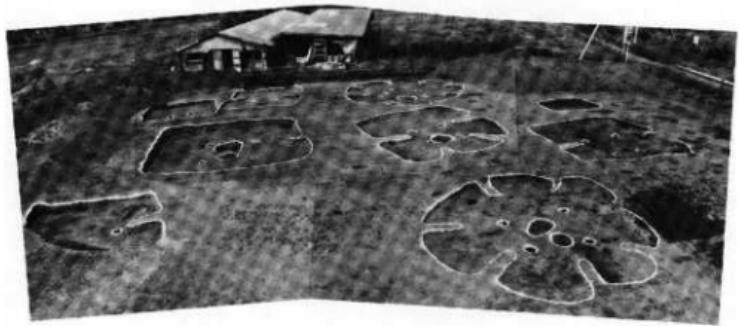


11

図版 7 熊野原遺跡 B 地区(1)

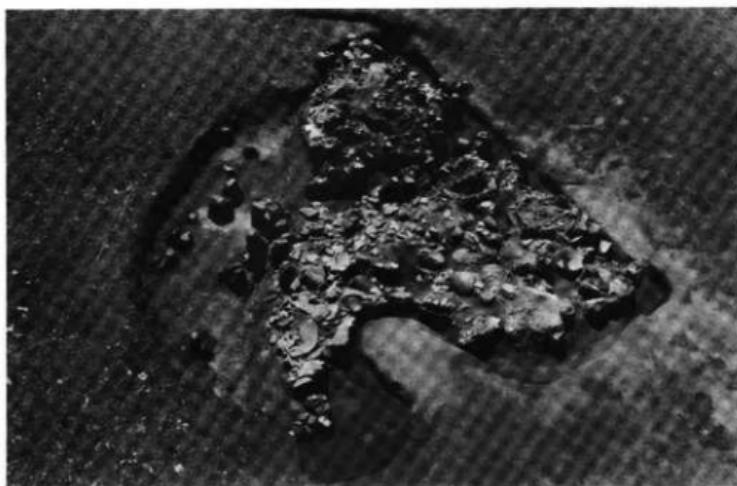


遺構分布状況（南から）

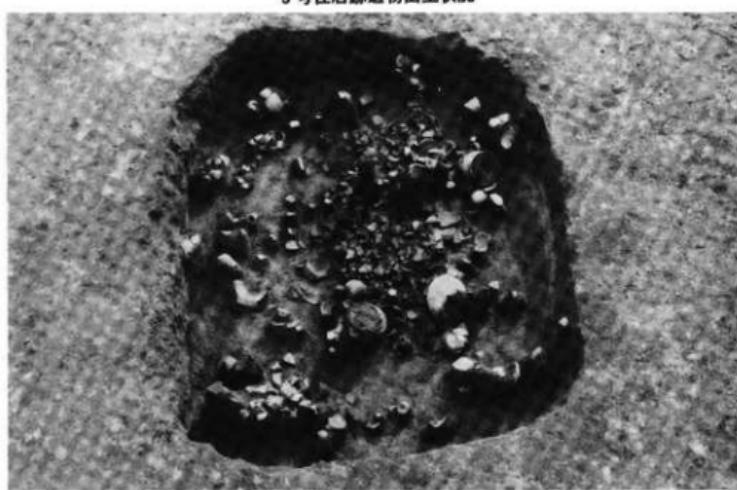


住居跡群近景

図版 8 熊野原遺跡 B 地区(2)

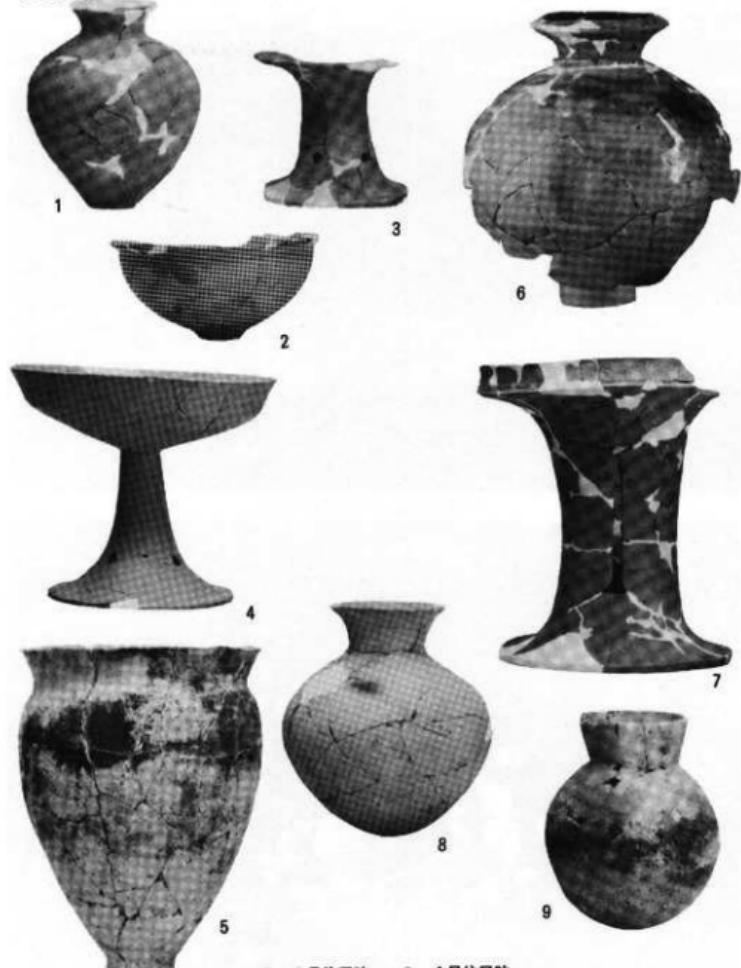


5号住居跡遺物出土状況



1号土塙遺物出土状況（東から）

図版9 熊野原遺跡B地区(3)



出土遺物

1. 1号住居跡  
2. 4号住居跡  
3. 3号住居跡  
5. 6号住居跡  
6. 5号住居跡  
7. 8. 1号土塙

図版10 前原西遺跡(1)

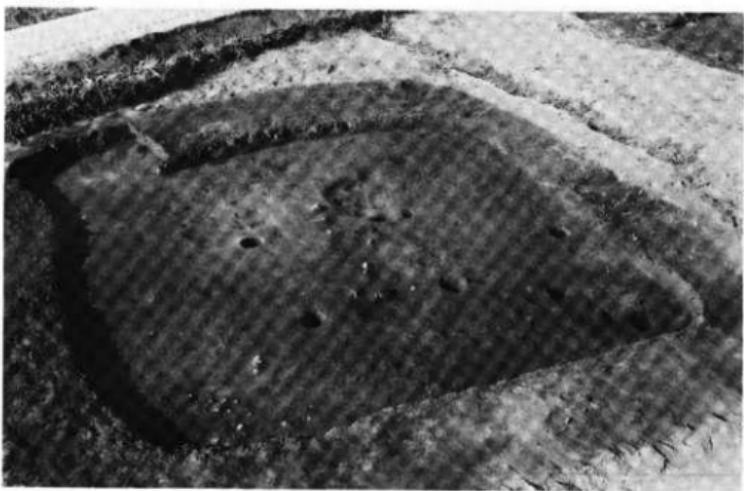


前原西遺跡B地区北区近景

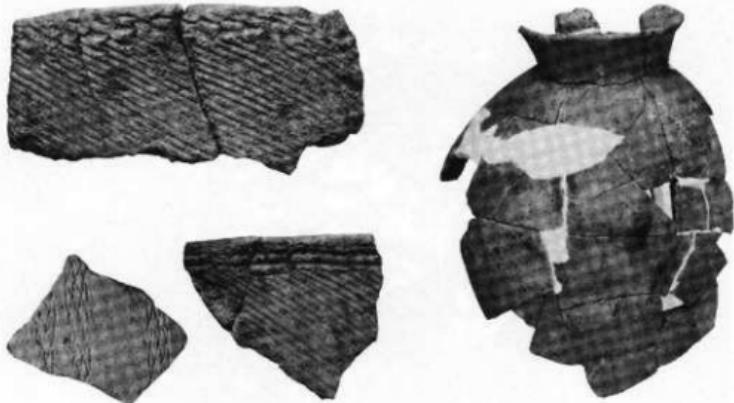


前原西遺跡B地区10号集石遺構

図版11 前原西遺跡(2)

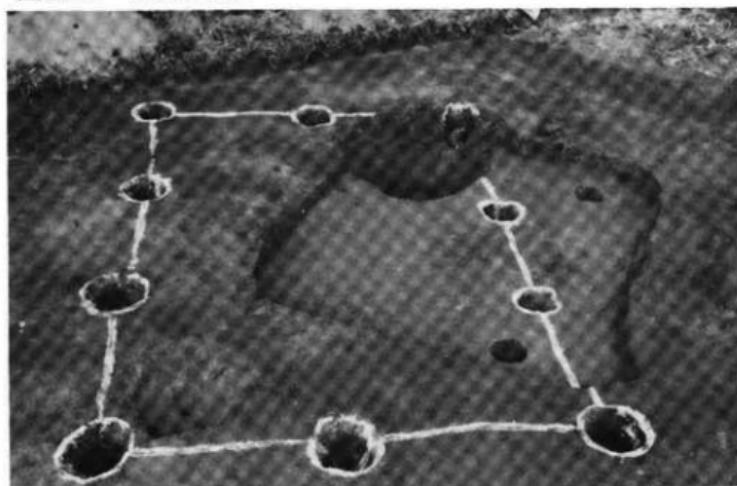


前原西遺跡B地区1号住居跡



前原西遺跡B地区出土遺物

図版12 前原南遺跡(1)

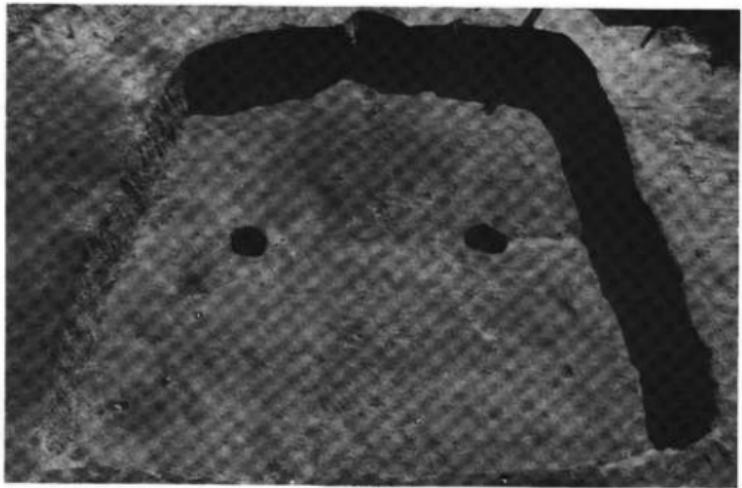


9号住居跡

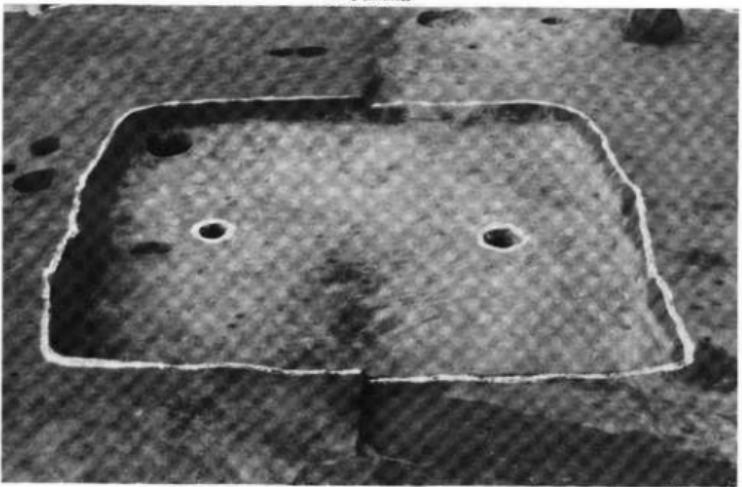


9号住居跡土器出土状況

図版13 前原南遺跡(2)

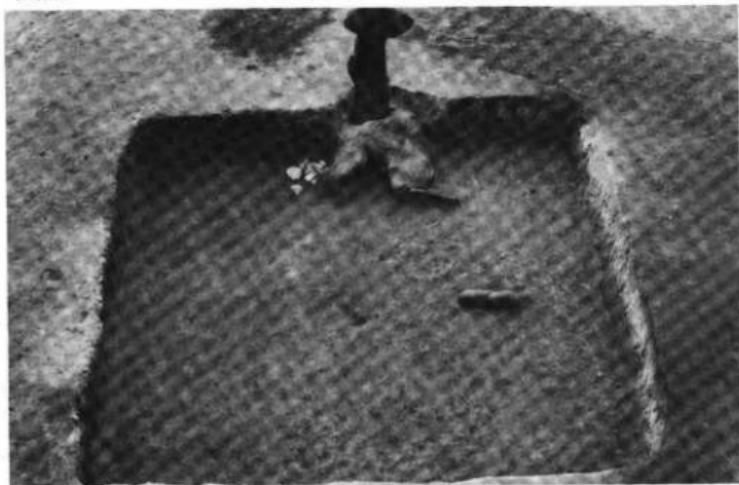


8号住居跡



4号住居跡

図版14 前原南遺跡(3)



6号住居跡



6号住居カマド検出状況

図版15 前原南遺跡(4)



9号住居跡出土土器

図版16 前原南遺跡(5)



1



2



3



4



5



7



6



8



9

1、2：4号住居跡出土土器 3：8号住居跡出土土器

4～8：6号住居跡出土土器 9：B地区柱穴出土土器

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅲ）

発行年月日 昭和58年3月31日

編 集 宮崎県教育庁文化課

発 行 宮崎県教育委員会